

札幌市立大学

教員研究紹介

2014



札幌市立大学

SAPPORO CITY UNIVERSITY

1. デザイン学部

No	専門分野	職位	氏名	研究課題名	ページ
1	空間デザイン	教授	中原 宏	地域の多様性とコミュニティデザインに関する研究	1
2	空間デザイン	教授	羽深 久夫	北海道における民家の移築・活用 ー厚真町の旧畑島家住宅の保存・再生を事例としてー	1
3	空間デザイン	教授	矢部 和夫	地域の湿原やその他の生態系における生物多様性の保全・再生と創出に関する研究	2
4	空間デザイン	教授	吉田 恵介	コミュニティデザイン手法によるエリアマネージメントの可能性に関する研究	2
5	空間デザイン	准教授	斉藤 雅也	異分野連携による建築環境デザインの展開研究	3
6	空間デザイン	准教授	山田 良	環境芸術の地域に果たす役割	3
7	空間デザイン	講師	上田 裕文	①積雪寒冷地の冬季都市景観イメージに関する北海道とラップランドの比較研究 ②風景イメージスケッチ手法を用いた風景計画に関する研究	4
8	空間デザイン	講師	片山 めぐみ	老人福祉施設を拠点とするまちづくりに関する研究	5
9	空間デザイン	助教	金子 晋也	①デザインサーベイを通じた北海道沿岸部の空間特性に関する研究 ②壁面と天井面の変化からみた民家再生事例の内部空間の特徴に関する研究	5 6
10	製品デザイン	教授	蓮見 孝	ウェルネスに着目した療養環境改善と地域創成に関する研究	6
11	製品デザイン	教授	酒井 正幸	①生態展示施設のグランドデザイン ②ユニバーサルデザイン研究	7
12	製品デザイン	准教授	柿山 浩一郎	講義内容改善を目的とした、学生からの講義に対する意見収集システムの評価	8
13	製品デザイン	准教授	張 浦華	形態の感性評価の相関要因に関する研究	8
14	製品デザイン	講師	小宮 加容子	子どもを対象にした安全かつ使いやすい形状およびサインのデザインに関する研究	9
15	製品デザイン	講師	三谷 篤史	①メカトロ積み木を用いた視覚性記憶トレーニングツールの開発 ②口腔ケアシミュレーションモデルの開発	9 10
16	コンテンツデザイン	教授	城間 祥之	デザイン価値の測定・評価方法に関する研究 ー 中国由来加工食品のパッケージデザインの印象評価 ー	10
17	コンテンツデザイン	教授	石井 雅博	視覚の認知および感性に関する研究	11
18	コンテンツデザイン	教授	齋藤 利明	オールビスクによる創作人形制作研究と人形を主体とした空間演出	11
19	コンテンツデザイン	教授	細谷 多聞	視覚的環境情報の電子化とその活用に関する研究	12
20	コンテンツデザイン	講師	大淵 一博	タブレット型端末を活用した看護OSCE 運営・評価支援システムの運用と検証	12
21	コンテンツデザイン	講師	福田 大年	スケッチ作業を活かしたアイデア発想ディスカッション「クルクルスケッチ」の開発	13
22	コンテンツデザイン	講師	松永 康佑	身体形状計測データに基づいた仮想身体表現	13

No	専門分野	職位	氏名	研究課題名	ページ
23	メディアデザイン	教授	上遠野 敏	現代美術創作研究	14
24	メディアデザイン	教授	吉田 和夫	ユニバーサルデザイン視点からの動物園のサイン計画研究	14
25	メディアデザイン	准教授	武田 亘明	クリエイティブ人材育成の実践的学びの場のデザイン ～初任者の就業継続のためのスタートアップサポート～	15
26	メディアデザイン	講師	石田 勝也	札幌国際芸術祭を通じた北海道のクリエイティブ産業に対するニーズ調査及び地域貢献への実証研究	15
27	メディアデザイン	講師	杉本 達應	情報の視覚化に関する技術調査と教材開発	16
28	メディアデザイン	助教	須之内 元洋	地域文化資産のデジタルアーカイヴデザイン手法の開発	16
29	共通教育	教授	原 俊彦	ドイツと日本における無子の増加に関する研究	17
30	共通教育	教授	町田 佳世子	語用論を切り口とした英語文法編成の試み	17
31	共通教育	講師	松井 美穂	アメリカ南部文学研究	18

2. 看護学部

No	専門分野	職位	氏名	研究課題名	ページ
32	基礎看護学	教授	樋之津 淳子	使用済み注射針とキャップの取り扱いに関する研究	18
33	基礎看護学	教授	定廣 和香子	実習安全に向けた教授活動自己評価尺度の開発	19
34	基礎看護学	准教授	大野 夏代	マッサージのリスクを最小化する試み	19
35	基礎看護学	准教授	古都 昌子	看護基礎教育の臨床実習における物理的環境の現状	20
36	基礎看護学	講師	田中 広美	からだにやさしい移動・移乗支援補助用具の試作と実用性の検証	20
37	基礎看護学	助教	小田嶋 裕輝	2型糖尿病患者の首尾一貫感を高める患者教育プログラムの開発と検証	21
38	基礎看護学	助教	檜山 明子	入院患者に対する転倒予防対策に関する研究	21
39	基礎看護学	助手	横川 亜希子	就職後1年以内に医療事故の当事者となった看護師の職業経験に関する研究 ー医療事故の克服過程で生じた経験に焦点を当ててー	22
40	看護管理学	教授	猪股 千代子	地域で暮らす高齢者・難病患者の生を支える全人的統合医療ケアリング・ヒーリングプログラムの研究	22
41	看護管理学	助教	坂東 奈穂美	看護学生の経年的コミュニケーションスキルの構造化	23
42	小児看護学	教授	松浦 和代	低学年児童の基礎活動力を高める転倒予防マットレスの開発と運動プログラムへの適用	23
43	小児看護学	准教授	上村 浩太	看護師への継続学習支援「リレー方式学習」の展開・評価	24
44	小児看護学	講師	三上 智子	A県内の保健の授業に関する実態調査の報告 ー第1報 小学校の調査ー	24

No	専門分野	職位	氏名	研究課題名	ページ
45	母性看護学	教授	宮崎 みち子	性暴力被害者支援に関する研究	25
46	母性看護学	准教授	渡邊 由加利	妊娠期・育児期にある家族の子育て支援プログラムの検討 ー「おしゃべりサロン」開催ー	25
47	母性看護学	講師	山内 まゆみ	「私はこんな助産師になるぞ！」プロジェクト2014の運営と評価	26
48	母性看護学	講師	山本 真由美	母性看護学における実践能力を強化するための教材の開発	26
49	母性看護学	助教	石引 かずみ	助産師の専門職的自律性と産科医師との協働の関連	27
50	成人看護学	教授	川村 三希子	認知症を伴う高齢がん患者の疼痛アセスメントのプロセス	27
51	成人看護学	准教授	貝谷 敏子	リソースナースの地域活用によるシームレスな連携体制の構築と効果の検証	28
52	成人看護学	准教授	菅原 美樹	高度実践看護師の教育と評価に関する研究	28
53	成人看護学	講師	神島 滋子	高次脳機能障害患者・家族の生活の実態と生活上の工夫について	29
54	成人看護学	講師	工藤 京子	在宅酸素療法患者の災害に対する認識	29
55	成人看護学	講師	藤井 瑞恵	北海道の壮年期の維持透析患者における生活上の課題	30
56	成人看護学	助教	柏倉 大作	動画を活用した自己学習支援型の注射のシミュレーション教育に関する研究	30
57	老年看護学	准教授	村松 真澄	北海道の病院の周術期口腔機能管理に関する看護管理者の取り組みの実態調査	31
58	老年看護学	講師	原井 美佳	中年期女性の尿失禁リスク要因解明と尿失禁への対処行動促進に関する研究	31
59	精神看護学	教授	山本 勝則	精神障害者への関わりについての看護学生の自信の変化 ー精神症状を演じる模擬患者との演習の前後比較ー	32
60	精神看護学	准教授	守村 洋	メンタルヘルスおよび自殺予防に関する研究	32
61	精神看護学	助手	星 幸江	長期入院統合失調症患者の退院好機を見定める臨床判断要素 ～熟練看護師の関わりに焦点を当てて～	33
62	在宅看護学	教授	スーディ神崎 和代	認知症状遅延を意図した環境整備	33
63	在宅看護学	准教授	菊地 ひろみ	訪問看護ステーションの看護師教育プログラム開発に係る基礎研究	34
64	在宅看護学	助手	御厩 美登里	訪問看護師の職務継続意向に関連する要因	34
65	地域看護学	教授	河原田 まり子	ソーシャル・キャピタルを活用した地域保健活動の推進	35
66	地域看護学	准教授	清水 光子	都市部の高齢者の暮らしをサポートする地域の人々の活動	35
67	地域看護学	講師	櫻井 繭子	産業保健に関わるシステムに関する研究	36
68	地域看護学	助教	田仲 里江	地域保健分野におけるソーシャル・キャピタルに関する研究	36

* 2015.3.31現在の職名で記載

1. デザイン学部

中原 宏 Hiroshi NAKAHARA	教授 デザイン学部（空間デザインコース） キーワード：地域構造、都市機能、多様性、市街地再編、コンパクトシティ
地域の多様性とコミュニティデザインに関する研究	
【研究の概要】 これまでのわが国の都市計画では、都市機能については混合を排除し、純化（専用地域化）を目指すため、用途地域などによる各種の規制・誘導施策を行ってきた。とりわけ新市街地の住宅地開発整備においては、住宅以外の用途については厳格な立地規制が行われてきた。その一方で、1960～1970年に開発整備された大規模住宅団地をはじめとして、今日の郊外住宅地では住民の高齢化や施設の老朽化による空洞化がいっそう進展するとともに、居住者の新たな生活を支える環境が乏しく、住宅地は活力を失い始めている。 本研究は人口減少時代に移行したわが国の都市について、居住地や市街地構造の再編を検討する上での知見を得るため、札幌市中央区を対象として、都市機能の多様性を街区単位で分析を行い、新たな市街地のあり方について考究したものである。 街区ごとに土地利用の多様性を、建築施設（中分類8用途）の床面積構成に基づきシン普森の多様度指数により計測を行った。その結果、多様度指数の極めて大きい街区が集積している地区は、「創成東地区」、「狸小路」、「すすきの地区」等の界隈性のあるエリアであることが明らかとなった。 これに対し、都心部の札幌駅～大通地区や、南西部の円山地区は、多様度指数の小さい街区で構成されている。これらの地区は、それぞれ業務地区、住宅地区としての専用化による土地利用のため、落ち着いた雰囲気醸し出す一方で、単調な街並を呈しているエリアであることが明らかとなった。	

羽深 久夫 Hisao HABUKA	教授 デザイン学部（空間デザインコース） キーワード：建築史・都市史、歴史的建造物の保存・再生、建築構造・建築材料
北海道における民家の移築・活用 ー厚真町の旧畑島家住宅の保存・再生を事例としてー	
【研究の概要】 勇払郡厚真町の民家遺構については、平成21年（2009）から町内全域での悉皆調査を行い、北陸の福井県・石川県・富山県・新潟県からの入植者の民家遺構が確認された。平成23年度（2011）に厚真町古民家推進協議会が設立され、「厚真町の古民家再生に関する提言書（平成24年3月）」、平成24年度（2012）に「厚真町古民家再生基本計画（平成25年2月）」が町に提出された。畑島住宅が町に寄付された後、平成25年度（2013）に移築・活用のための基本・実施設計が完了し、平成26年度（2014）に移築工事が竣工した。旧畑島家住宅は明治後期に建築された後、昭和初期に水害により移築されたもので、現富山県の民家形式である枠の内と呼ばれる梁をキ型に組むヒロマを有する農家である（越中造、越中建とも呼ばれる）。歴史的建造物は通常、文化財指定をして、建築基準法の適用除外を受けるが、本住宅は木材の非破壊試験を行い、建築基準法第37条の国土交通大臣の指定建築材料の規定も認められた画期的な事例である。従来、建築基準法の適用除外で成立していた歴史的建造物の保存・再生が、通常の建築確認申請で行えるので、今後の道内の歴史的建造物の保存・再生の好例になる。また、厚真町の枠の内の遺構は、現在の富山県ではほとんど見られない形式で建築史においても重要な遺構である。	



矢部 和夫

教授 デザイン学部（空間デザインコース）

Kazuo YABE

キーワード：環境デザイン、自然再生、ビオトープ、地域の
自然景観、湿原

地域の湿原やその他の生態系における 生物多様性の保全・再生と創出に関する研究

【研究の概要】

北海道苫小牧市に位置するウトナイ湖を対象に、1984 年～2009 年の間の水生植物群落の分布パターンの変遷を明らかにし、その変化をもたらした環境要因について解析した。分布パターンの変遷では、スギナモ群落の減少やホザキノフサモ群落、セキショウモ群落の拡大など、25 年間で分布パターンが大きく変化していた（図 1）。

CCA では、全窒素と塩類がスギナモ群落と正の相関があり、水深、DO、pH はホザキノフサモ群落とセキショウモ群落と正の相関、SS は負の相関があった。これら群落分布と各因子の傾向は多重比較検定の結果と一致した。CCA で抽出された主な環境要因と湖内の経年的な観測資料の比較では、水深、Cl⁻、SS の経年的増加とそれに対応する群落変化の関係が良く一致した。また、CCA では水深の説明力が最も高かったことから群落分布の変化を最も合理的に説明する環境要因は水深であることが確かめられた。

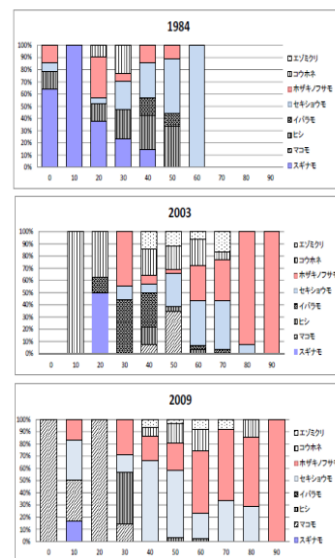


図 1. 群落分布の変化

吉田 恵介

教授 デザイン学部（空間デザインコース）

Keisuke YOSHIDA

キーワード：コミュニティデザイン、エリアマネージメント、ランドスケープデザイン、景観

コミュニティデザイン手法による エリアマネージメントの可能性に関する研究

【研究の概要】

地域に根付くデザイン手法によるエリアマネージメントの可能性について、いくつかのプロジェクトにおいて実践的な研究を行った。具体的には筆者が設計をした美瑛町憩が森公園の植物資源を使った保育園園児とのクラフトワーク、駅前商店街の活性化に係る本学学生とのヒアリング及び踏査、白老町における国立民族博物館設立に係る、事業関係者へのサイトプランニング指導、美瑛町まちづくり基本計画については住民とのワークショップ方式による方向性形成、札幌市においては都心の緑に親しむため学生参加方式でのウォーキングマップづくり、南区簾舞まちづくり協議会や八剣山発見隊、さらには札幌の農業を考える会の活動を通じた地域活性化活動を行った。

その結果、当該地域における地域住民による地域資源や風景資産の再発見、活用に関して、観光、環境、文化面からその社会・経済的な意義と地域のアイデンティティを確立する上で若干の寄与ができたと思われる。

特に住民のみならず訪問者（学生等）の目を通じた多様な視点は、今回のコミュニティデザインを行うための重要な条件となり、今後のまちづくり、商店街づくり及び販売空間（マルシェ）等のデザインやサイトプランニングや動線計画に反映することができた。

齊藤 雅也

准教授 デザイン学部（空間デザインコース）

Masaya SAITO

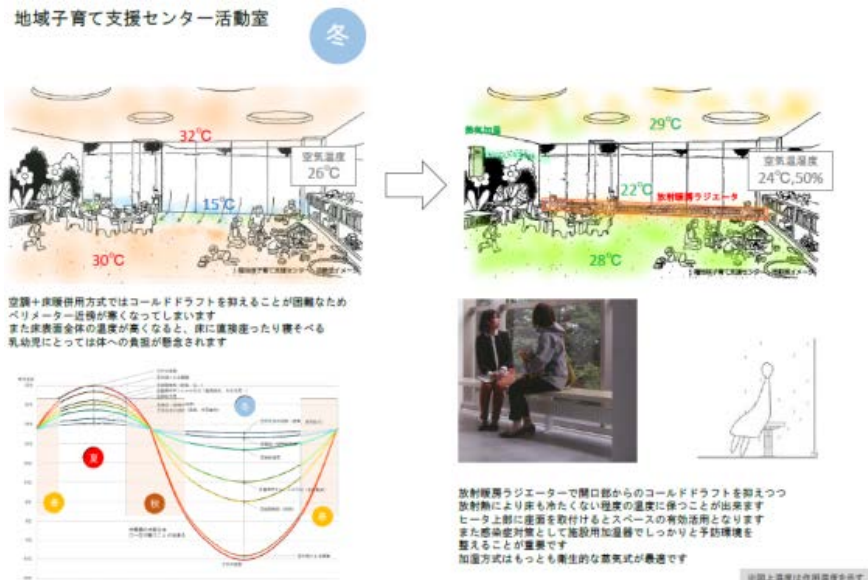
キーワード：建築・都市環境デザイン、自然エネルギー、
温熱快適性

異分野連携による建築環境デザインの展開研究

【研究の概要】

北広島市の新市庁舎計画にあたり、異分野連携による建築環境デザインを行なった。執務・共用スペース、子育て支援センターの計画では様々な専門家と協働で「放射＋対流式の暖冷房・換気計画」などの新しい温熱環境デザインを試みた。

右図は、北広島市の新庁舎 1 階に併設予定の「地域子育て支援センター」の温熱環境デザインの概念図である。室内は、木製遊具などを配置するとともに、床面占有型の活動が多く想定されるので、高断熱窓・床暖房方式を採用し、冬季の湿度コントロールにも配慮した。



山田 良

准教授 デザイン学部（空間デザインコース）

Ryo YAMADA

キーワード：環境芸術、空間デザイン、建築設計

環境芸術の地域に果たす役割

【研究の概要】

地域における環境芸術の役割を考察した。自らの制作した空間と地域の風景、歴史、慣習とのつながりについて論述した。2015 年度環境芸術学会論文集へ投稿中。また来住者の行動との連関を探り、今後の空間造形手法の展開への基礎とした。

2014 年度に考察と検証をおこなった作品



上田 裕文

講師 デザイン学部（空間デザインコース）

Hirohumi UEDA

キーワード：風景計画、造園、健康・観光まちづくり、地域環境マネジメント、森林美学

積雪寒冷地の冬季都市景観イメージに関する 北海道とラップランドの比較研究

【研究の概要】

積雪寒冷地の地域資源である雪文化に着目し、独自の発展を見せる北海道とフィンランド、ラップランドの比較研究を行った。冬季積雪時の雪景色を対象とした都市景観のパブリックイメージを明らかにするため、北海道の札幌市と、ラップランド地方のロヴァニエミ市において、大学生を対象としたアンケート調査を実施した。

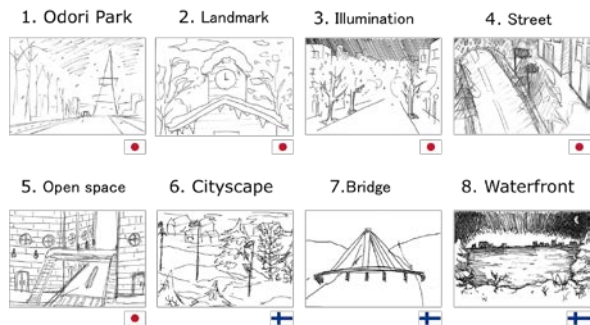
札幌市立大学とラップランド大学部のデザイン学部学生約 100 名ずつを対象に、ランドスケープイメージスケッチ手法を用いた描画実験を取り入れた調査を行った。また、アンケートでは合わせて、都市への愛着や居住年数を質問した。

その結果、得られたイメージスケッチは、「都市」「自然」「日常生活」「イベント」の 4 カ

テゴリーに分類され、フィンランドでは「自然」が、日本では「日常生活」続いて「都市」が最も多く描かれていた。また、スケッチの描き方から、フィンランドの方が遠景で、日本では近景で風景が捉えられる特徴があることが明らかになった。

フィンランドでは、愛着が強い人ほど「都市」を描くのにに対し、日本では「日常生活」を描く傾向も見られた。

また視点については、愛着の強い人ほどフィンランドでは近景と遠景の両者のスケッチが増えるのに対し、日本では遠景のみが増えるといった傾向が見られた。愛着と居住年数には正の相関が見られた。



「都市」に分類されたイメージスケッチの例

上田 裕文

講師 デザイン学部（空間デザインコース）

Hirohumi UEDA

キーワード：風景計画、造園、健康・観光まちづくり、地域環境マネジメント、森林美学

風景イメージスケッチ手法を用いた風景計画に関する研究

【研究の概要】

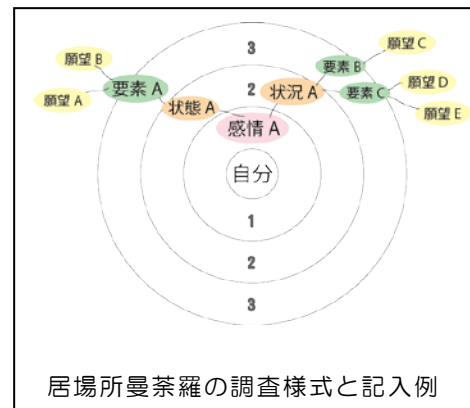
これまで、手法として構築してきた「風景イメージスケッチ手法（LIST）」を、地域づくりなどの実践に応用し、風景計画としての学術的な体系化を目指した。

今年度は、看護分野での応用という点を意識し、メンタルマッピング、コンセプトマッピングを参考とした「居場所曼荼羅」という手法について検討を行った。これは、個人主体を中心に、意識上での情緒的な世界の広がりとして、それに対応する環境要素を結びつけ、図示するという構成手法の一形態である。人々が安心できる居場所の環境要素抽出がねらいである。

大学院での連携プロジェクト演習を通して、教育の一環としてその考案から検証までを行い、一定の有用性を確認することができた。

これまでの風景イメージスケッチ手法は、共同研究におけるフィンランドとの都市イメージ比較調査として実践した。両国の日常生活における都市の持つ役割の違いや、都市の将来像の比較から、札幌市における都市整備における課題が明らかになった。

これらの研究を通して、風景計画の学術的な体系化にむけたさらなる知見の蓄積を進めることができた。



居場所曼荼羅の調査様式と記入例

片山 めぐみ

講師 デザイン学部（空間デザインコース）

Megumi KATAYAMA キーワード：福祉施設、まちづくり、縁側サービス

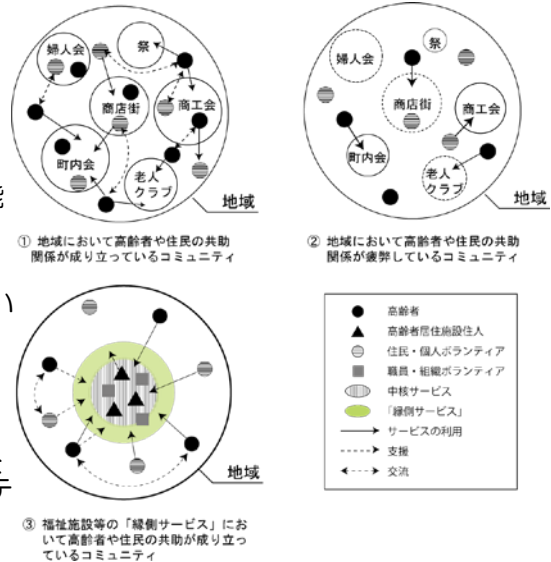
老人福祉施設を拠点とするまちづくりに関する研究

【研究の概要】

現在、我が国では地域の中で孤立する高齢者とコミュニティとを結びつけ、地域の人々との交流の中で、終の住処までの環境移行をシームレスにするしくみづくりが急務である。

本研究では、高齢者介護福祉施設を地域福祉核とし、そこが提供する高齢者や障害者を対象とした介護保険外のちょっとしたインフォーマル・サービスを隣家の縁側でお茶を飲みながら話をするような気軽なサービスと位置づけ、高齢者と地域コミュニティを結び付ける「縁側サービス」と定義した。そして、そのあり方と可能性について運営や文化背景の異なる8団体（日本2例、アメリカ2例、イギリス1例、ブラジル3例）を調査し、比較検討した。

今からおよそ10年前から、いずれの国においても、行政支援ではない民間による縁側サービスが出現し、地域の高齢者がサービスを受けるだけでなく、ボランティア活動など、積極的に生きがいを求める場として福祉法人施設が活用されていることが把握できた。法人のサポートは場所提供だけでなく、在宅高齢者に対する緩やかな見守りや役割、アクティビティの提供、ボランティア組織づくりに至るまで多様である。



金子 晋也

助教 デザイン学部（空間デザインコース）

Shinya KANEKO

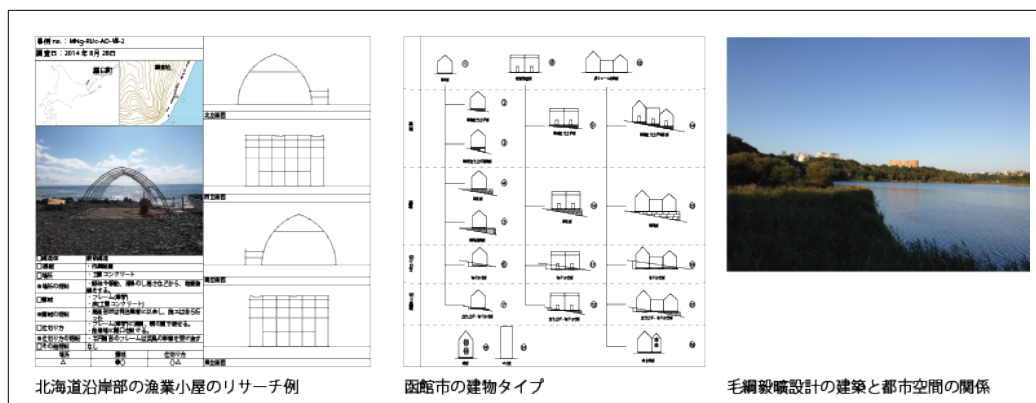
キーワード：北海道、沿岸部、デザインサーベイ

デザインサーベイを通じた 北海道沿岸部の空間特性に関する研究

【研究の概要】

本研究は、デザインサーベイという視点に基づき、北海道沿岸部の都市および建築に関して調査・研究を行った。その研究成果として、以下の3つの視点から検証することで北海道沿岸部の空間構成の一端を明らかにすることができた。

(1)北海道沿岸部の漁業小屋のリサーチ：北海道沿岸部の漁業小屋に関する現地調査を実施し、計15市町村計35地域の漁業小屋の写真データ、22ヶ所の実測データを得た。
(2)函館市の都市空間の構成：函館西部地区について、文献資料による函館西部地区の都市空間の変遷、現地調査を実施し、建物の構成を18のタイプに整理した。
釧路市近郊における近現代建築：釧路市内に現存する現代建築家・毛綱毅曠の作品を対象に、建築と都市空間の関係についての現地調査を実施した。



金子 晋也

助教 デザイン学部（空間デザインコース）

Shinya KANEKO

キーワード：建築、民家、再生

壁面と天井面の変化からみた 民家再生事例の内部空間の特徴に関する研究

【研究の概要】
本研究は、1980年代以降、日本にほんにおける民家再生のデザインを牽引した「降幡建設計事務所」と「古民家再生工房」を研究対象とし、各事例を再生前後の空間構成要素の分析資料として、現地調査で得た図面を用い、分析対象は再生前後の部屋の用途から出入口空間、回廊空間、接客空間の計76部屋とした。
分析では、まず壁面構成の変化パターンを立体的変化、面的変化、壁面変化、変化無しといふ4つ共通する性格をまとめ、天井面構成の変化パターンを架構表出の変化、階上利用の変化、変化無しに整理した。壁面構成の変化パターンと天井面構成の変化パターンの組合せのうち、異なる複数の事例から抽出できる典型的な8パターンを抽出し、下図のように、これらに対し各部屋の機能の対応関係を整理することで、民家再生の内部空間の特徴が、民家本来の空間に対して現代的な建築的操作によって位置付けられる様相の一端を明らかにした。

金子晋也,堀江亨:壁面と天井面の変化からみた民家再生作品の内部空間の特徴に関する研究,日本建築学会計画系論文集 80(709), 569-578, 2015-03

模式図	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
変化のパターン	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
出入口空間	3	4	0	5	4	1	0	0
回廊空間	2	3	3	1	3	6	0	3
接客空間	0	0	1	0	0	0	7	9
建築的操作の水準	形状構成の操作				空間利用の操作			既存空間の維持

蓮見 孝

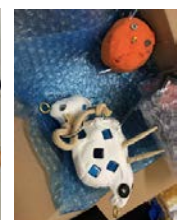
教授 デザイン学部（製品デザインコース）

Takashi HASUMI

キーワード：ウェルネス、ナースコール、COC、
地域創生デザイン、二地域居住

ウェルネスに着目した療養環境改善と 地域創成に関する研究

【研究の概要】
1) COC について
平成 25 年度に全国 52 の大学提案事業の1つとして採択された文科省の補助事業「地（知）の拠点整備事業（COC）」は2年目を迎え、教育、研究、地域貢献、広報の4チームの活動、毎月1回の幹事会と推進会議、2回の連絡会議、1回の事業評価部門会議を開催するなど、順調に推移した。平成 27 年3月 21 日には「まちの学校プレオープン」のイベントを開催し、5月9日の正式オープンの検証をおこなった。
2) 科研・基盤（A）について（研究代表者）
平成 25 年度に採択された、「タイム・スペースシェアリング型地域連携による地域創成デザイン研究（TSS）」では、井戸端寺子屋 in 札幌会議を2回開催するとともに、居住体験実証実験や交流ワークショップを開催し、研究基盤の構築に努めるとともに二地域居住による地域活性化の可能性と課題を明らかにすることができた。
3) 科研・基盤（C）について（研究分担者）
療養環境におけるウェルネス向上の取り組みの一環として、医療機関で使用されている「ナースコール」に着目し、手作りナースコールの効果検証をおこなうべく、2カ所の医療機関の小児病棟において、入院患者と保護者を対象としたナースコールを手作りするワークショップをおこない、その経過を報告するとともに、効果の検証をおこない論文にまとめるとともに、日本感性工学会春季大会で口頭発表した。（右図）



酒井 正幸

教授 デザイン学部（製品デザインコース）

Masayuki SAKAI

キーワード：生体展示、動物園、バイオミメティクス

生態展示施設のグランドデザイン

【研究の概要】

札幌市円山動物園内の「動物園の森」および、本学芸術の森キャンパスと隣接する「札幌芸術の森」を一体化した「芸術の森地区」を市民や学生を対象とした環境教育拠点や観光拠点として活用するための基礎調査研究を実施した。芸術の森地区においては、平成 25 年度制作の「いきものマップ」をベースに、同地区の施設、動植物その他を総合的に一覧でき、利用する市民への分かりやすい情報提供を目指す総合マップの編集に着手した。本マップは次年度前半の完成を予定している。

また、円山動物園をフィールドとした研究では、園内の動物園の森（ビオトープ）の保全とその他の植物、昆虫、水生動物等の生態系調査、市民への部分的公開への支援を行った。ビオトープの展示手法については、先進事例の調査（東山動植物園等）を行い、今後の動物園の森の活用計画の参考とした。これらの成果は、同園動物園の森ボランティアを対象とした講習会（2015 年 4 月開催）で報告の予定である。尚、本研究は平成 26 年度札幌市円山動物園からの受託研究と連携して行われた。

これらの調査研究成果等を基に、身近な生物である昆虫に着目し、これをデザインの視点から分析し、環境教育やデザイン基礎教育に役立てるための考察を行いその概要を日本感性工学会で発表した。また、同様に、生物の機構等を産業へ活用するという観点から、北海道立総合研究機構と連携しバイオミメティクス（生物模倣）技術研究にも着手し、その初期の成果を日本人間工学会北海道支部大会で発表した。

将来的には、本研究を発展させ、現在の研究フィールドである芸術の森地区、円山動物園はもとより、博物館等他の札幌市内の関連展示施設と連携した広範な環境・デザイン教育拠点としての活用につなげていきたい。

酒井 正幸

教授 デザイン学部（製品デザインコース）

Masayuki SAKAI

キーワード：ユニバーサルデザイン、盲導犬

ユニバーサルデザイン研究

【研究の概要】

平成 25 年度に引き続き、ユーザとしてヒトの他に盲導犬も含めたユニバーサルデザインデザイン環境構築のための基礎研究を実施した。

北海道盲導犬協会の協力のもと、訓練犬に小型カメラを装着し訓練ルートを歩行、誘導時の訓練犬の視線の動きを記録した。また、同様に小型カメラを装着した一般成人の訓練ルート歩行時の視線も記録、両者の視界の差異を分析した。両者の眼高差に起因する視界の違いは予想以上に大きく、盲導犬の視線は遠方より近距離の路面上に滞留する傾向にあり、路面上の視覚環境に大きな影響を受ける可能性が示唆された。また、次年度に向け、盲導犬の犬種の外見の違いが一般歩行者に与える影響について、画像を使用した主観評価による予備実験を行った。これらの研究成果は次年度日本感性工学会論文として投稿の予定である。

また、視覚障害者を主対象とする家具デザイン研究においては、引出の取っ手の形状に着目し、様々な取っ手の形状が引出の触知による識別にどの程度影響を与えるのかについての予備実験を行った。これに加え、引出内に音声を発生する機構を設け、音声による引出の識別の可能性についても、プロトタイプを制作して検討を行った。これらの研究成果は次年度日本感性工学会において口頭発表を予定している。

ユニバーサルデザイン全般については、第 5 回国際ユニヴァーサルデザイン会議、第 16 回日本感性工学会、日本人間工学会北海道支部大会等に参加し、最新の研究・関連製品開発動向等を調査した。この調査結果は、本学関連授業（学部および研究科）、札幌市大通高校関連授業、地域のユニバーサルデザイン関連団体での講演等への活用を図った。

柿山 浩一郎

准教授 デザイン学部（製品デザインコース）

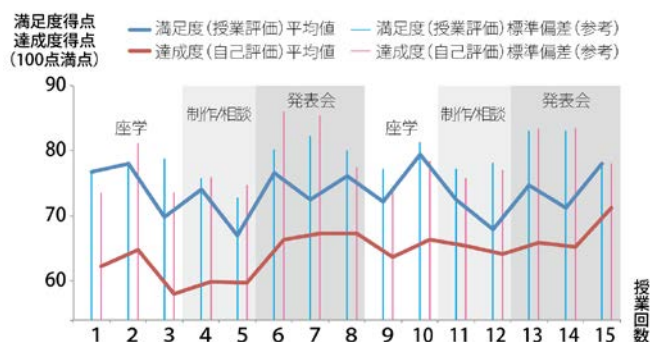
Koichiro KAKIYAMA

キーワード：講義内容改善、システム評価、満足度、達成度

講義内容改善を目的とした、学生からの講義に対する 意見収集システムの評価

【研究の概要】

左図に示すような、毎回の授業において授業内容に対する、授業評価的ニュアンスの【満足度】と、自己評価的ニュアンスの【達成度】を100点満点で収集するシステムを運用し、その評価データを得た。結果、右図（一部抜粋）を得たが、受講スタイルが異なることによって、学生の評価結果に違いがでることを見いだすことができたことから、本システムを通して、授業内の各回の内容の改善を行うことが可能になると結論づけた。



張 浦華

准教授 デザイン学部（製品デザインコース）

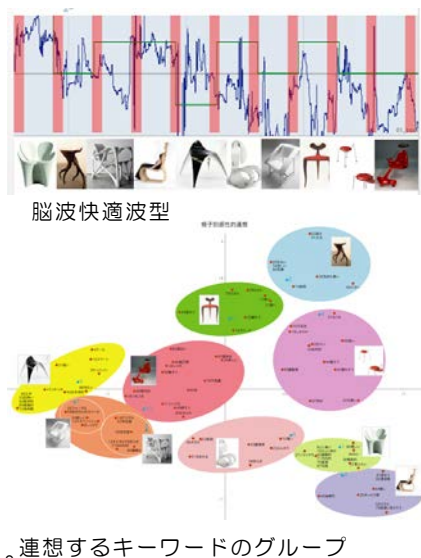
Puhua ZHANG

キーワード：感性評価、イメージ連想、形態

形態の感性評価の相関要因に関する研究

【研究の概要】

デザインの形態に対しての感性評価について、“デザイナー”と“非デザイナー”の相違がこれまでの研究で明らかになったが、この感性評価の相違はどのように異なるのか、どのような要因によって生じたのかについて、前年度「感性連想」、「他事象との関連」の視点から、研究を進めた。本研究では評価対象の評価の角度（とらえかた）と連想するキーワードの特徴の違いから評価結果の相違が生起していることが見られた。評価対象に対し非デザイナーの場合、狭い角度（個人の生活圏中心的）から主観的に評価しているのに対し、“デザイナー”の場合は、多角度、客観的に評価している傾向が見られる。評価対象に対し“デザイナー”は幅広くイメージを連想しているのに対し、“非デザイナー”の場合、連想するイメージの範囲が狭く限られている傾向が見られた。連想するキーワードのグループ



小宮 加容子

講師 デザイン学部（製品デザインコース）

Kayoko KOMIYA

キーワード：キッズデザイン、ユニバーサルデザイン、玩具療法

子どもを対象にした安全かつ使いやすい 形状およびサインのデザインに関する研究

【研究の概要】

子どもにとっての安全かつ使いやすい形状およびサインのデザインについて遊びイベントを実施し、その成果より検証・考察した。

本年度実施した遊びのイベントでは、下記の通りである。

1. コネキッド in そらのガーデン「しゃぼん玉とんだ！」
8月2日、JRタワーエスタ屋上そらのガーデンとプラニスホールにて、「しゃぼん玉」をテーマに複数の遊びを実施した。
2. 「なりきって遊ぼう！」
11月9日、「さっぽろ絵本読み聞かせフェスタ」にて、絵本「はらぺこあおむし」をモチーフにした、体を使った遊びを実施した。
3. 「じいばあ・パパママ・ぼくわたし」
12月13日、「SORA こそだてフェスティバル 2014」にて、祖父母、親、子どもの世代間交流をテーマに遊びを実施した。
4. 「こすってでるでる！もようがいっぱい」
2015年3月7日-8日、「キッズワークショップカーニバル in ふくしま 2015」にて、「フロッタージュ」技法を活用した遊びを実施した。



図1. 各イベントの様子

三谷 篤史

講師 デザイン学部（製品デザインコース）

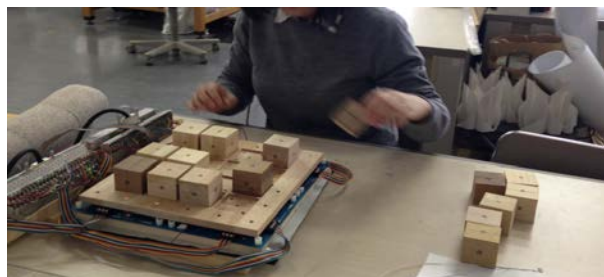
Atsushi MITANI

キーワード：作業療法、リハビリテーション、視覚性記憶、メカトロニクス、組み込みシステム

メカトロ積み木を用いた 視覚性記憶トレーニングツールの開発

【研究の概要】

これまでに開発してきたメカトロ積み木を応用し、視覚性記憶範囲トレーニングツールを開発した。記視覚性記憶範囲の検査では、連続的に提示された情報を患者が覚え、それを同一または逆の順序で答えていくことが要求される。そこで、LED点灯によってメカトロ積み木を置く場所を提示し、その場所にメカトロ積み木が置かれたかを判別可能なシステムを開発した。本ツールは、患者の操作に合わせて反応を返すメカトロ積み木と、そのメカトロ積み木を置くためのメカトロプレート、メカトロプレートを制御するためのコンピュータで構成される。メカトロプレートは、メカトロ積み木の形状に合わせたマスで区切られており、各マス目の中央にはLEDが組み込まれている。トレーニングの際には、各マス目のLEDが任意の順番で点灯していく。患者は、LEDの点灯順または逆順にメカトロ積み木をマス目に置いていくことが課される。正解すると、それに合わせてメカトロ積み木やメカトロプレートが反応を示す。課題達成に至るまでのプロセスはコンピュータに記録されるため、作業量表紙はより正確に患者の状況を把握することが可能となる。



三谷 篤史

講師 デザイン学部（製品デザインコース）

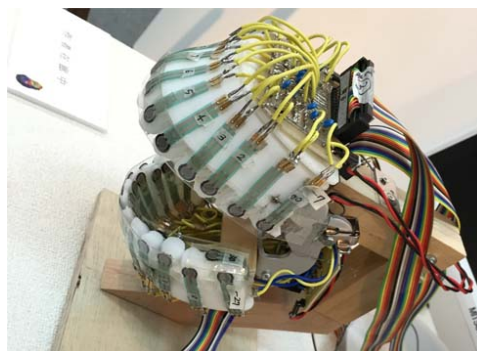
Atsushi MITANI

キーワード：シミュレーション、看護教育、メカトロニクス、モデリング、センシング

口腔ケアシミュレーションモデルの開発

【研究の概要】

高齢社会になり、誤嚥性肺炎の予防や周術期の口腔ケアの大切さが啓蒙されるようになってきている。しかしその一方で、看護虚位宇井邦夫氏は、学生の口腔ケア手技の習得およびその評価を効果的に行う方法が十分に検討されていない。本研究は、このような口腔ケア教育の現状をふまえ、より適切な口腔ケアのトレーニングができる口腔ケアシミュレータを開発することが目的である。ここでは、口腔ケアシミュレータのプロトタイプを開発した。これは、口腔ケアを施すための歯形モデルと、手技の記録および評価を行うソフトウェアにより構成される。歯形モデルは、人の頭蓋骨の 3D モデルから歯列モデルを抽出し、積層造形機を用いて出力した。ソフトウェアは、Windows の MFC アプリケーションとして開発した。歯の表裏には圧力センサが貼り付けられており、口腔ケア時におけるブラシの圧力が計測できる。圧力センサからの信号は、アナログ入力を介してコンピュータに取り込まれ、手技の記録としてリアルタイムに保存される。



城間 祥之

教授 デザイン学部（コンテンツデザインコース）

Yoshiyuki SHIROMA

キーワード：感性評価、情報デザイン、デザイン価値測定
パッケージデザイン、日中比較研究

デザイン価値の測定・評価方法に関する研究 — 中国由来加工食品のパッケージデザインの印象評価 —

【研究の概要】

本研究は情報コンテンツの感性価値測定・評価方法に関する研究の一環として行ったものである。本研究では、中国と日本の消費者が家庭料理用加工食品のパッケージデザインのどこに注目しているのか、両者の意識に違いがあるのかなどについて、日本で最も普及している中国由来食品の一つである麻婆豆腐のパッケージデザインを対象に、中国人留学生 32 名と日本人学生 32 名を被験者として印象度評価実験を実施した。その結果、中国人と日本人では、加工食品のパッケージデザインとして消費者に伝達（訴求）すべき重要な感性情報である“おいしそうに見える”の印象に有意差があった。同様に、麻婆豆腐の味の特徴である“辛そうに見える”の印象にも有意差があった。

次に、麻婆豆腐のパッケージデザインが消費者に“おいしそう”と感じさせる要因はどこにあるのかを明らかにするため、“おいしそうに見える物”を目的変数に、“辛そうに見える物”、“満腹感を感じさせる物”、“パッケージのスタイルが良い”、“親しみを感じさせるデザイン”、“思わず手に取ってみたいくなるデザイン”を説明変数として、回帰分析を行った。その結果、日本製麻婆豆腐のパッケージに対して、中国人は“パッケージデザインのスタイルが良い”ものを“おいしそう”と感じており、日本人は“親しみを感じさせるデザイン”のものを“おいしそう”と感じていることが判った。

石井 雅博

教授 デザイン学部（コンテンツデザインコース）

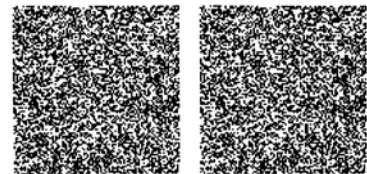
Masahiro ISHII

キーワード：視覚心理、認知、ヒューマンインタフェース

視覚の認知および感性に関する研究

【研究の概要】

ランダムドットステレオグラム図形を用いて、奥行き知覚・認知に関する研究を行いました。ランダムドットステレオグラムは不規則に配置されたドットで構成された図形内に両眼網膜像差を付加した視覚刺激であり、単眼観察ではランダムノイズ平面にしか見えませんが、両眼観察では奥行き知覚を生みます。この図形による奥行き知覚は線画ステレオグラムによるそれよりも困難であることや、視差が与えられる領域の外縁に線画の枠を付加すると奥行き知覚が容易になることが報告されています。本研究では、両眼網膜像差を与えるターゲット領域をダイナミックランダムノイズで描画した刺激を用いて図地分離を行い、奥行き検出閾値を計測しました。この刺激の背景領域は通常のランダムドットステレオグラムであり、ターゲット領域は時間的にドット配置が変わる動的ランダムドットステレオグラムというものにしました。実験の結果、図地分離様態のランダムドットステレオグラムでターゲットの奥行きを検出する閾値は、通常のランダムドットステレオグラムのそれよりも低くなることが分かりました。



齋藤 利明

教授 デザイン学部（コンテンツデザインコース）

Toshiaki SAITOU

キーワード：オールビスクドール、舞台美術、グラフィックデザイン、空間演出

オールビスクによる創作人形制作研究と 人形を主体とした空間演出

【研究の概要】

「花の精霊」をテーマに新たに3体のオールビスク（磁器）による創作人形の制作を行なった。制作は、原型を油土で制作したものを石膏型取りして石膏に置き換え、その石膏原型から流し込み用石膏型を型取り制作し、泥漿による流し込み技法を用いた。磁土は焼成時の白さを得る為に、有田の[白磁 100]を用いた。焼成は陶芸用電気釜で素焼きし[900度]、表面を滑らかに研磨した後、1145度で本焼きを行なった。眼球は頭部内面より眼球部分をくり抜き、頭部内側から人間と同様の光彩を持つガラスアイを装着。各パーツはコンプレッサーを使用し均一に吹き付けを行い、眼口等を手描き。頭髮はモヘアの細い原糸や羽毛を制作する人形に合わせて様々な色に染めたものを植毛して制作を行なった。人形制作に合わせて、展示に使用する台座や衝立てなどの小道具を全て自作して空間演出を行なった。



細谷 多聞

教授 デザイン学部（コンテンツデザインコース）

Tamon HOSOYA

キーワード：インタラクショナルデザイン・インターフェイス
デザイン・遠隔操作・移動型ロボット

視覚的環境情報の電子化とその活用に関する研究

【研究の概要】

本研究では、遠隔実現を提供する移動型の視野提示環境を構築し、地域情報の発信に役立てる研究基盤の構築を行っています。平成 26 年度の実績としては、（１）移動型ロボットの試験運用を行い、移動のための操作条件の検証を行いました。また、（２）無線 LAN 環境を活用した視野映像の配信についての検証実験を行い、映像遅延に関する改善データの収集を行いました。

（１）については、２タイプの操作方法を試作し、各々の操作特性について実験調査を行いました。今後は、この実験から得られた知見を元に、操縦環境の新たな設計試作を行い、より多様な遠隔移動体験ができるように改善を行っていく予定です。

（２）については、昨年度の検証結果が得られているものの、データ伝送のボトルネックとなる諸要素について改善を進めました。その結果、映像サーバーの処理能力を高めることや、伝送速度の改善により、XGA サイズ程度の映像を確認しながら、恒常的に移動できる環境が得られました。

以上に示した本年度の研究成果を踏まえ、27 年度は、遠隔実現を提供するロボットの移動操作環境の改善、及び、ソフトウェア上の視野情報の効率的な提示方法について研究を進める方針を立てることができました。

大淵 一博

講師 デザイン学部（コンテンツデザインコース）

Kazuhiro OHBUCHI

キーワード：OSCE、タブレット、システム開発、教育支援

タブレット型端末を活用した 看護 OSCE 運営・評価支援システムの運用と検証

【研究の概要】

OSCE（Objective Structured Clinical Examination：客観的臨床能力試験）は看護基礎教育において、看護実践能力の育成に効果的である。本学でも開学以来 OSCE を実施しており効果を上げている。

OSCE では多くの業務が必要とされるが、担当者の負担が非常に大きいことが問題となっている。そこで、本学では PC を活用した運営支援システムを構築し、担当者の負担を大きく軽減することに成功した。また試験当日に学生に評価結果を返却することが可能となったことで、教育効果を向上させることができた。

平成 25 年度には、さらなる運営効率化を目的として、タブレットを活用した運営支援システムを開発した。一部の試験で試行し、運営上の効率化が図られることを確認した。平成 26 年度は本格的に活用し、試験はスムーズに実施され、人的にも時間的にも大きな削減効果が得られた。実際にタブレットを利用した教員にアンケート調査を行ったところ、おおむね満足したとの回答が得られた。システムに関してはいくつかの要望が寄せられたが、全体として好意的な意見が多かったことから、今後も本システムを継続して活用している予定である。



設問	設問項目	評価欄
1	血圧測定1 ▶ 採点基準を見る	○2 - ○0 ○x
2	血圧測定2 ▶ 採点基準を見る	○2 ○1 ○0 ○x
3	血圧測定3 ▶ 採点基準を見る	○2 ○1 ○0 ○x
4	血圧測定4 ▶ 採点基準を見る	○2 - ○0 ○x
5	血圧測定5 ▶ 採点基準を見る	○2 ○1 ○0 ○x

福田 大年

講師 デザイン学部（コンテンツデザインコース）

Hirotooshi FUKUDA

キーワード：アイデア発想、参加型デザイン、知識マネジメント、インタラクションデザイン

スケッチ作業を活かしたアイデア発想ディスカッション 「クルクルスケッチ」の開発

【研究の概要】

たくさんの人でアイデア発想するための手法として、スケッチ作業を活かしたアイデア発想ディスカッション「クルクルスケッチ」の開発と活用方法の模索を平成 23 年度から行なっています。

精神障がい者の自立支援プロジェクトの中で 23 年度に考案したのが「クルクルスケッチ」です。24 年度は市民向けワークショップで利用した結果、いろいろな方が参加するアイデア発想会議もサポートできる手法なのが分かりました。25 年度は大学の講義で学生対象に導入しました。すると、学生のアイデアの量と精度が向上し、時間も短縮されました。ここまでの活動で、「クルクルスケッチ」には、参加者のアイデア発想の流れが記録できるので、アイデア発想を活性にするだけでなく、作業後に振り返り、アイデアを練り直す際にも活用できることも分かってきました。ただそのことが、アイデア発想後の活動にどう影響するかについては検証ができていませんでした。今年度は、講義、学外プロジェクト、高校出前授業で実施しましたが、記録と振り返り作業にいくつかの工夫をして臨みました。すると、どのワークショップでも記録と振り返りをするることにより、参加者の特性（能力・性格など）を知るきっかけにもなっていたようです。

以上のことから、「クルクルスケッチ」は参加者全員のアイデア発想プロセスが記録できるだけでなく、参加者の特性を知る手段となり、その後のディスカッションなどに良い影響を与える可能性があることが分かりました。

松永 康佑

講師 デザイン学部（コンテンツデザインコース）

Kosuke MATSUNAGA

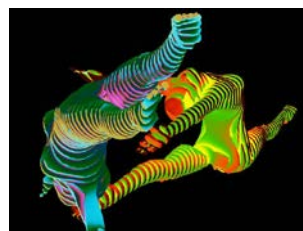
キーワード：コンピュータグラフィックス、仮想身体、モーションキャプチャ、数値造形

身体形状計測データに基づいた仮想身体表現

【研究の概要】

これまでに取り組んできた仮想身体に関する映像表現の可能性について、新たな視点を含めた研究を行った。身体の形状計測では撮影機材や計測機材を整備し複数台のカメラを制御することで、撮影した画像から三次元形状を求めることが可能となった。これを用いてコンピュータグラフィックスによる顔表情のアニメーション表現について分析を行った。また、運動計測では、画像処理ベースのモーションキャプチャ環境を整えた。これを用いてダンスや北海盆踊りなどの専門家の動きを計測し、動作の記録・アーカイブ化および初学者への教育用コンテンツの作成に関する取り組みを行った。

実際の人物の形状や動作を細かく計測・再現する一方で、身体データを用いたコンピュータグラフィックスならではの表現として、図に示すような多層構造による身体表現を行った。これは、オリンピック等で代表的な 7 種の競技について、その競技ごとに特徴的なポーズを 7 枚の静止画組作品としてまとめ、作品全体でスポーツの躍動感を表現したものである。図は 7 枚の静止画の中から 2 つのポーズを抜粋し再構成したものであり、展覧会授賞式宣伝用のポスター図案として採用されたものである。上記の静止画組作品は、2014 アジアデジタルアート大賞展 FUKUOKA において優秀賞の評価を得ることができた。



上遠野 敏

教授 デザイン学部（メディアデザインコース）

Satoshi KATONO

キーワード：現代美術、地域活性化、まちづくり

現代美術創作研究

【研究の概要】

1)「札幌国際芸術祭 2014」の招待作家として炭鉱の歴史を踏まえて札幌の近代を照射する作品を発表した。2)作家兼アートディレクターとして炭鉱遺産を活用した「そらち炭鉱の記憶アートプロジェクト」を実施して炭鉱の記憶を掘り起こす作品を発表した。3)日本人のアイデンティティを考察した自然神や仏性の現れをテーマにした、写真作品「ネ・申（さる）・イ・ム・光景」シリーズは日本全国を取材して作品を発表した。



吉田 和夫

教授 デザイン学部（メディアデザインコース）

Kazuo YOSHIDA

キーワード：サイン、高揚感、ユニバーサルデザイン、
情報デザイン、メディア

ユニバーサルデザイン視点からの動物園のサイン計画研究 （※受託研究/札幌市円山動物園）

【研究の概要】

平成 22 年に園内サイン計画が現行のデザインにリニューアルされてから6年あまりが経過し、当初の目的はほぼ達成されている。他方、園外から動物園へのアプローチは今後の課題とされている。特に地下鉄円山公園駅から円山公園に入り、動物園に至る道の誘導サインは未整備である。円山公園には、テニスコートや動物園、自然との一体感が楽しめる登山道・木道・豊かな植生などの優れたポテンシャルがあり、公園総体としてのブランディング的視点が必要と思われる。26 年度の受託研究では、円山公園内サイン素案として動物園内マップとデザイン連動した路面サインタイルとキロポスト（道標）の提案を行った。動物園内マップに関しては、これまでも施設更新に合わせて調整を行って来たが、今年度は平成 30 年のゾウ舎新設までの施設更新計画を踏まえた基本案として見直しを行った。合わせてユニバーサルデザインの観点から、図像を介した情報伝達の可能性をさぐり、今後の動物園マップ調整に反映させる予定である。



路面サインタイルとキロポストのデザイン

武田 亘明

准教授 デザイン学部（メディアデザインコース）

Nobuaki TAKEDA

キーワード：社会人スタートアップサポート、就業支援、キャリア支援教育

クリエイティブ人材育成の実践的学びの場のデザイン ～初任者の就業継続のためのスタートアップサポート～

【研究の概要】

少人数の世代・異業種間交流の場を構築し、就業継続のため相談体制を構築した。それは個別の課題解決と相互の支え合いに繋がった。

実践的に学ぶキャリアデザインの状況的学習として (1) 実業の場に参加 (2) 自己役割認識 (3) スキルアップ (4) やりがいと達成感 (5) 全体を見渡す目 (6) 部分の意義理解、と段階的に実務理解を促し、また、世代間交流・人間関係構築のため (1) 全学生・卒業生が交流する場 (2) 就職活動の情報共有 (3) 卒業生による職場・就職アドバイス (4) 卒業生間の情報交換の場 (5) ゼミ教員による個別面談、を設けている。

これにより (1) 学生相談は就業意義の理解と就職活動の動機付け (2) 学生卒業生面談は、就業への覚悟と就職活動の具体的な課題の解決 (3) 全学生が採用内定を獲得・就業 (4) 実践経験は、卒業研究深化と希望就職の実現への力 (5) 企業人面談は、仕事の具体的なイメージと厳しさに触れる機会 (6) 多様な職場の人間関係を知りストレスコントロールのヒント獲得 (7) 異業種就業者との交流は、異なる視点の獲得 (8) 就業環境や職場人間関係等の相談は、就業継続や社内転属希望等に適切な判断 (9) 厳しい就業環境や採用条件の相談は、転職等に対応 (10) メディア活用は、遠隔者面談調整や相談実施等を円滑に実施することができた。

石田 勝也

講師 デザイン学部（メディアデザインコース）

Katsuya ISHIDA

キーワード：サウンドアンドビジュアル、インタラクション、メディアアート

札幌国際芸術祭を通じた北海道のクリエイティブ産業に対する ニーズ調査及び地域貢献への実証研究

【研究の概要】

2015 年に行われた札幌国際芸術祭において、本学の企画による公開講座、また本学教員における展示作品のワークショップ等の機会にアンケート調査を行い、札幌のクリエイティブ産業のブランディング及び教育機関である本学に対する市民のニーズの把握を目指した。なお、行った企画は以下の通り。

芸術祭会場で使用されるインフォメーション映像や上映プログラムの編集

芸術祭会期中、放映された映像プログラム。本制作作業は講師の石田監修のもと 4 年生によって制作され、札幌の玄関口であるチカホ北 3 条広場での情報提供に役立てられた。

国際芸術祭公式サイトにおけるアーカイブ構築と実践

芸術祭開催期間中、発行されていたフリーペーパーに学生が記事や写真を投稿。アーカイブ化と情報発信を並行して行った。

「コロガル公園 in ネイチャー」のワークショップの実践

YCAM による作品「コロガル公園」。本作品はワークショップ「子どもあそびばミーティング」によって、子供たち自らが追加したい遊びや機能を話し合い、それらが反映されている。本ワークショップを学生とともに運用し、コンセプト理解、子供たちとのコミュニケーション、アイデアの実装・制作作業を通じて、メディア・空間・身体性についての実践的理解を深めた。

大学祭での YCAM interLab スタッフ講演会の開催

札幌国際芸術祭でも様々な作品のテクニカルサポートを行っている YCAM の研究開発チームディレクターである伊藤隆之氏を招聘し、様々な取り組み、札幌国際芸術祭の作品の技術的なお話を伺う公開講座を企画した。

杉本 達應

講師 デザイン学部（メディアデザインコース）

Tatsuo SUGIMOTO

キーワード：ビジュアルライゼーション、クリエイティブ・コーディング、アプリケーション開発

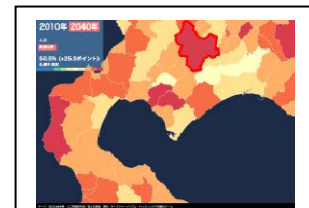
情報の視覚化に関する技術調査と教材開発

【研究の概要】

本研究では情報の視覚化に関する技術調査と、その結果を教材開発にいかすことを目的としている。26年度は主に以下の活動を行った。

- (1) データ視覚化と関連の深いプログラミング言語を用いてクリエイティブな表現を行う手法である「クリエイティブ・コーディング」をテーマに連続公開講座を企画実施し、当該専門知識・技能を地域の専門家、関心ある市民に還元した。
- (2) 「デザイン総合実習Ⅲ（メディアデザイン）」の制作課題として、D3.js を利用した情報視覚化のプログラミングを採用して、データの調査収集と分析とその視覚化をテーマに教育実践を行った。
- (3) メディアディレクションチームとして参画した札幌国際芸術祭 2014 公式プロジェクト「コロガル公園 in ネイチャー」では、子どもの遊びを創出するメディアの仕掛けとして、独自のモバイルアプリ「ジャンピングサウンド」（一般非公開）を開発した。

今後も情報の視覚化に関するデザイナー向けの支援システム技術の調査をすすめるとともに、技術習得のための教材を開発していく予定である。



視覚化の作例

須之内 元洋

助教 デザイン学部（メディアデザインコース）

Motohiro SUNOUCHI

キーワード：メディア環境学、メディア情報学、デジタルアーカイブ、メディア芸術

地域文化資産のデジタルアーカイブデザイン手法の開発

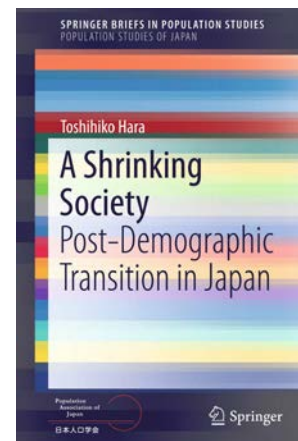
【研究の概要】

個人や少人数であっても、気持ちと少しの時間さえあれば、デジタルアーカイブの構築を行うことが十分に可能な時代になった。人が育んできた様々な取り組みや地域遺産は、記録資料をアーカイブ化することによって資産化される。アーカイブは社会との接点を築き、発展させてゆくための契機となる。

アーカイブというと、権力（図書館・美術館・博物館など）が受動的な管理人（アーキビスト）に記録の集積を要請し、研究者等の記録の査定者を介して記憶が記述され、ミュージアムや書籍などを介して社会に媒介されるといった枠組みがイメージされるが、権力や管理人によって価値があると判断された対象のみがアーカイブされることになる。ところが、未だ社会に価値を認められていなくとも、今後大きなインパクトをもたらすかもしれない成果や活動は、世の中に無数に存在する。必要とする人が、最低限のコストで無理なく実用的なデジタルアーカイブを構築できる環境を作ることが、本研究のゴールである。



原 俊彦 Toshihiko HARA	教授 デザイン学部（共通教育） キーワード：少子高齢化、人口減少、地方創生、人口社会学、家族社会学
ドイツと日本における無子の増加に関する研究（継続）	
【研究の概要】 ドイツと日本で急速に進行しつつある無子（チャイルドレス）割合の増加について、その背景と方向性を探る、国際比較研究の過程で、超少子高齢化・人口減少社会に対応した社会保障システムのデザインとそのシミュレーションを扱った F.X.カウフマン『縮減する社会-人口減少とその帰結』を翻訳出版（2011 年 6 月）、この日本バージョンの研究を進め、その成果を、自ら創刊した日本人口学会編、日本の人口学研究シリーズの 1 冊として出版した。 Population Studies of Japan © 2015 A Shrinking Society, Post-Demographic Transition in Japan	



町田 佳世子 Kayoko MACHIDA	教授 デザイン学部（共通教育） キーワード：語用論、英語教育、文法
語用論を切り口とした英語文法編成の試み	
【研究の概要】 私は、他の研究者とともに、英語の文法体系を語用論（言葉が実際の場面で用いられる際の原理や原則を研究する領域）と関連づけて再構成する研究をしています。 私たちは言葉を使うとき、相手が理解しやすく、かつ不快にならない言い方をしたいと思っています。文法というと無味乾燥で厳格なルールというイメージがありますが、実はどの言語の文法にも、そのような思いを実現する工夫が織り込まれています。ただこれまでは、あまりその側面が強調されることがなかった気がします。 たとえば、受動態という表現方法がなければ、 （何かのお店で、帰ろうとするお客様に店員さんが話している場面を想像してください） (1) You haven't paid the bill yet. （お客様、まだ代金をお払いになっていません） と相手をあからさまに責めることになりますが、受動態があるおかげで、 (2) The bill has not been paid yet. （お支払いがまだなのですが） とすることができ、「あなたが悪い」という印象を和らげます。言いにくいことを言う手立てとして受動態が使われるのです。 このような工夫は否定文、過去形の文、a/the などの冠詞などありとあらゆる文法の中に見いだせます。文法項目が持つ言語使用上の働きを整理し、コミュニケーションに役に立つ文法体系に組み直すことを目的として研究を行っているところです。	

松井 美穂 Miho MATSUI	講師 デザイン学部（共通教育） キーワード：アメリカ南部文学、黒人文化、ウィリアム・フォークナー、モダニズム
アメリカ南部文学研究	
【研究の概要】 平成26年度は、アメリカ南部の白人作家ウィリアム・フォークナーの作品とアフリカ系アメリカ人の文化、特にその聴覚文化との関係の考察を進めた。フォークナーにおける人種的アイデンティティ（ホワイテネス）と黒人文化の「音」との関係进行分析し、その成果をアメリカ文学会北海道支部第173回研究談話会（北海学園大学）において、「“Like a Nigger”：オリジナル版『サンクチュアリ』におけるホレス・ベンボウの黒さについて」というタイトルで発表した。本発表ではフォークナーの小説『サンクチュアリ』のオリジナル版に登場する白人弁護士ホレス・ベンボウの分析を行い、彼が物語の中でひきつけられる「黒人の歌」が、いかに白人男性としての彼の人種／ジェンダー・アイデンティティを攪乱するものであるかを論じ、カラー・ラインを超えて白人の耳に届くその黒人の歌は、ホレス自身のアイデンティティの不安を反映するものとなっていることを指摘した。	

2. 看護学部

樋之津 淳子 Atsuko HINOTSU	教授 看護学部（基礎看護学領域） キーワード：看護技術、人間工学、技術教育
使用済み注射針とキャップの取り扱いに関する研究	
【研究の概要】 平成17年度および23年度に厚生労働省より、針刺し切創による医療従事者等への感染防止のため、使用済みの注射針に再びキャップすることを原則禁止することが通知された。しかし、再びキャップすることによる受傷の割合は未だに全体の約1割という現状があり、針刺し切創による影響を考えると対策は急務であるといえる。そこで本研究は、看護学の教育機関で使用されている国内の書籍27冊を対象に、「患者に使用済みの注射針とキャップの取り扱い」と「薬液充填後の注射針とキャップの取り扱い」に関する記述内容を明らかにすることを目的とした。その結果、厚生労働省が通知した使用済みの注射針に再びキャップすることを原則禁止という「使用済み」の適応範囲は、臨床だけではなく、書籍においても「患者に使用済みの注射針とキャップの取り扱い」と「薬液充填後の注射針とキャップの取り扱い」の双方に適用されていない現状が明らかになった。また、「患者に使用済みの注射針とキャップの取り扱い」では、記述のあった書籍のうち約3割は「再びキャップする方法」を示し、約1割は使用後の注射器は膿盆に置き、その後注射器の後始末をすると示されていた。以上のことから、「使用済み」の適応範囲の明確化、「患者に使用済みの注射針とキャップの取り扱い」の方法、物品の統一を図っていくことが必要と考えられる。	

定廣 和香子

教授 看護学部（基礎看護学領域）

Wakako SADAHIRO

キーワード：実習安全、看護教育、ファカルティ、ディヴェロップメント、自己評価尺度

実習安全に向けた教授活動自己評価尺度の開発

【研究の概要】

看護学実習中に学生が医療事故を起こさないようにするために、教員は様々な事故防止対策を講じている。平成 26 年度は、看護学教員が実習中の医療事故防止に向けて講じている対策を自己評価する尺度の開発を目指し、次のような研究活動を行った。

平成 24 年度に質的研究を通して解明した教員の事故防止対策をもとに 8 下位尺度 56 項目の自己評価尺度を作成した。この尺度を用いて全国の看護学教員 2028 名を対象とした郵送法による質問紙調査を行った。その結果、881 名の教員から返信があり、有効回答は、786 部であった。信頼性・妥当性を検討する分析を行い、その結果に基づき、40 質問項目を選定し、「実習安全に向けた教授活動自己評価尺度（試行版）」と命名した。この成果は、平成 27 年度日本看護科学学会に投稿予定である。

また、「実習安全に向けた教授活動自己評価尺度」原版 56 項目の総得点と関係する教員の特性を明らかにした。この成果は、平成 27 年 10 月に米国にて開催される Sigma ThetaTau International Honor Society of Nursing Biennial Convention に採択され、口頭発表を行う予定である。

平成 27 年度は、自己評価尺度としての活用可能性高めるために、試行版を改良し、自己評価尺度を活用した実習安全研修を検討する予定である。

大野 夏代

准教授 看護学部（基礎看護学領域）

Natsuyo ONO

キーワード：マッサージ、リスク、看護技術

マッサージのリスクを最小化する試み

【研究の概要】

マッサージによる安楽を、より多くの患者に提供するためには、臨床場面におけるリスクを特定し、それらに配慮した実践が必要である。今年度は主に、患者を対象とするマッサージのリスクを吟味した。リスクを以下のように分類し、対応策を提案した。

1. 対象が病者であることによるリスク

疾患や治療の影響により、体調や皮膚の状態がマッサージに適さないことがある。また、認知機能の低下や体調の変化が起こりやすいという特徴があるため、マッサージ実施前後の慎重なアセスメントが必要である。

2. 環境が病床であることによるリスク

点滴スタンド等は、マッサージをする看護師の手や体の動きにより危険を誘発する可能性がある。点滴などのラインのトラブルを避けるため、ベッド柵を移動するなど、環境を整える。

3. 実施者である看護師にとってのリスク

ベッドの高さが低いこと、床に物が置かれていることより、看護師の姿勢が不適切になりやすいため、ベッドを動かくなどして看護師の立ち位置を確保する。

古都 昌子

准教授 看護学部（基礎看護学領域）

Masako FURUICHI

キーワード：看護基礎教育、臨床実習、物理的環境

看護基礎教育の臨床実習における物理的環境の現状

【研究の概要】

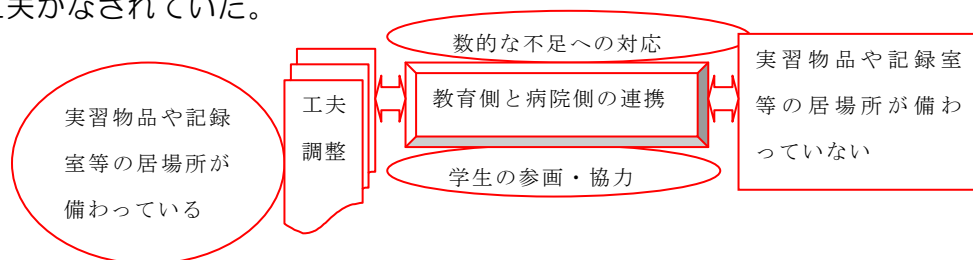
看護学を学ぶ学生にとって臨床実習の意義は大きく、学生は、多様な環境の中で看護職となる過程をたどっている。臨床実習の多様な環境要因の中で物理的環境に着眼し、より学びやすい環境調整について検討することを目的として取り組んだ。

研究対象は、3年課程看護学校49施設の実習調整担当教員であり、郵送法による自記式質問紙調査の結果を分析した。

質問紙の返却数は47部で回収率は48.0%であった。質問紙に記載された自由記述から実習物品が数的に十分ではない中で実習への影響を考慮しながら、患者への影響を及ぼさないように対応している現状がみられた。特定の不足しがちな物品をもちながら、実習施設である病院側と学生も参画し、調整・工夫している現状も明らかになった。

不足している物品は教育施設から持ち込むか、病棟の物品使用で工夫していた。記録室やカンファレンスルームは備わっている場合とそうでない場合があるが、対応の工夫がみられた。看護基礎教育の臨床実習の物理的環境は十分とは言えないが、教育側と病院の連携による創意工夫がなされていた。

図：臨床実習
における物
理的環境の
現状



田中 広美

講師 看護学部（基礎看護学領域）

Hiromi TANAKA

キーワード：看護技術、注射の技術、看護倫理

からだにやさしい移動・移乗支援補助用具の試作と実用性の検証

【研究の概要】

車いすへの移動や移乗が必要な被介助者（患者）は、移動・移乗の介助を受ける必要性とともに人にゆだねる心理的負担感がある。

一方、看護職や介護職者は、移動・移乗支援補助用具があることを認知しながらも、移動補助用具を用いずに自らの力で被介助者（患者）の身体を持ち上げている現状にあり、看護職が業務中に発症する腰痛有訴率は高い。

そこで、車椅子を利用している被介助者（患者）の移動を支援する「移動・移乗支援補助用具」を試作・提案しその有効性を検討することにした。

試作品の改良を重ねたあと、実験を行い、試作品に対する使用感、安定感などを検証することができた。現在、特許申請中である。



試作品



使用状況参考図

小田嶋 裕輝	助教 看護学部（基礎看護学領域）
Yuki ODAJIMA	キーワード：首尾一貫感、患者教育、慢性疾患、回復過程看護
2 型糖尿病患者の首尾一貫感を高める 患者教育プログラムの開発と検証	
【研究の概要】 糖尿病患者は食事療法・運動治療・薬物療法などの治療に伴う日常生活の制限を生涯にわたって受けることになります。しかし、治療の実施や実施に伴う生活管理に苦悩している実態が報告されています。近年、2 型糖尿病患者の生活管理行動や負担感情に関連する要因の 1 つとして首尾一貫感が着目されています。首尾一貫感とは全体的な物事への志向性のことで、把握可能感、処理可能感、有意味感の 3 つの下位概念からなります。首尾一貫感を高めることで、患者自身が歩んできた病気に至るプロセスが一つの筋道として捉えられるようになります。また、そのことにより、悪化や進展の予防につながるような、一貫した生活が患者自身の力によって行われることにつながると考えています。この首尾一貫感は看護師の支援と関連があることが分かっています。そこで、現在、2 型糖尿病患者の首尾一貫感を高める集団教育プログラムを開発し、その効果を検証することを目的とした研究に取り組んでいます。なお、研究を進める中で、回復過程看護の重要性を実感しています。そこで、将来的には回復過程看護の構造と機能を明らかにする研究に取り組んでいきたいと考えています。	

檜山 明子	看護学部（基礎看護学領域）
Akiko HIYAMA	キーワード：転倒予防 転倒リスクアセスメント
入院患者に対する転倒予防対策に関する研究	
【研究の概要】 入院患者の転倒リスク行動に着目したアセスメントを転倒予測に用いるためには、転倒リスクが高い者と低い者を弁別する正確さが必要である。そこで、昨年度明らかにした転倒リスク行動の概念を用いて、転倒リスク行動アセスメントツールを作成した。 次に、研究協力が得られた一般病床を有する 4 病院 20 病棟で調査を行い、転倒リスク行動アセスメントツールの判定確度と基準関連妥当性を検証した。 転倒の有無を従属変数として最尤法（変数増加法）を選択したロジスティック回帰分析を行った。当てはまりのよいモデルは、3 変数を投入したモデルであった。このモデルの Hosmer-Lemeshow の検定結果は、$p=0.97$、判別率的中率は、84.7%であり良好であった。3 変数を項目とした場合の ROC 分析でカットオフポイントを決定し、そのモデルによる判定確度を算出した。その結果、感度 65%(0.53-0.76)、特異度 84%(0.80-0.88)、判定精度 81%(0.77-0.85)、陽性的中率 44%(0.34-0.54)、陰性的中率 92%(0.89-0.95)、陽性尤度比 4.0(2.93-5.45)、診断オッズ比 9.45(5.18-17.22)であった。 転倒リスク行動アセスメントツールの合計点と、現在施設で使用している転倒リスクアセスメントツール（現ツール）の合計点の間には、正の中程度の相関が見られた($r=.535$)。 以上から、良好な判定確度と基準関連妥当性が確保されていることを確認した。	

横川 亜希子 助手 看護学部（基礎看護学領域） Akiko YOKOKAWA キーワード：新人看護師、医療事故、経験、克服
就職後 1 年以内に医療事故の当事者となった 看護師の職業経験に関する研究 －医療事故の克服過程で生じた経験に焦点を当てて－ 【研究の概要】 本研究は、就職後 1 年以内に医療事故の当事者となった看護師のうち職業を継続している看護師の医療事故の克服過程で生じた経験を説明する概念を創出することにより、その総体を明らかにし経験の特徴を考察することを目的として実施した。研究方法論に看護概念創出法を適用し、就職後 1 年以内に医療事故の当事者となった看護師のうち職業を継続している者を対象に半構造化面接法を用いてデータを収集した。収集した 6 名の看護師のデータを分析した結果、14 の概念が創出された。その 14 の概念とは、【事故発生に伴う非常事態への直面による救援要請・獲得と獲得不可による応急処置実施】【被害患者・家族・関係者・所属施設への被害・損失把握に伴う動揺・苦悩と被害患者回復に伴う苦悩軽減】【事故発生に伴う恐怖感襲来による心的機能停止】【勤務継続に伴う事故体験の受容と事故記憶の永続的残存の実感】などであった。考察の結果は、当事者となった看護師が事故に直面したことにより心理的な影響を受け、周囲から支援を受けて職業を継続していることを示唆した。当事者となった看護師が職業継続することができるよう、心理的支援及び安全な業務遂行へ向けた支援を提供することが必要である。
猪股 千代子 教授 看護学部 （実践看護学分野 看護マネジメント学領域 看護管理） Chiyoko INOMATA キーワード：統合医療、補完代替、自然治癒力、ケアリング、癒し、コミュニティ、スピリチュアル
地域で暮らす高齢者・難病患者の生を支える全人的 統合医療ケアリング・ヒーリングプログラムの研究 【研究の目的】1) 統合医療ヘルスケアシステム開発機構ハマナス・音楽&看護療法研究会における 12 編の研究論文の要約や研究結果・考察・結論に記載されている、人間観や健康観・環境観・看護観を、キーワードやキーセンテンスとしてあげ、統合医療の概念の特徴を導き出す。2) 得られた特徴から、統合医療の定義、統合医療看護の機（全人的ケアリングプロセス）を考察する。 【結果及び考察】生活の場で繰り広げられた実践・研究から得られた「統合医療」とは、1) 生活習慣の、行動・態度・感情・思考のすべての側面をふくむ人間の全体を対象とする癒し志向の医療。2) 治療者と患者の関係性を重視し現代医療と補完代替医療等、すべての適切な治療法を用いる医療。3) ケアリングマインドを根底に、病気の予防や弛緩（いやさか）に向け、異分野融合から生み出された審美的なケアを意識的・意図的に選択し養生・癒し法として、保健医療福祉・生活の場に取り入れる、継続性を含む包括的ケアシステム。4) 人間の健康の奥深さと広がりを探求するケアによって、ケアする人もされる人も、意識の拡張・霊的成長をもたらす医療であると定義される。統合医療看護の機能（全人的ケアリングプロセス）とは、従来の看護学に、新たに、1) 認知・否定的な感情につながる思考習慣に対するアプローチ。2) 審美的・意図的看護ケアの提供（異分野との融合による理論・方法論の開発）・その人にとって意味あるケアの創造である。3) 人間の健康の奥深さと広がりを探求すること、すなわち、その人の健康に対する考え・価値を明らかにすることを支援する、内容が加わることを示唆された。

坂東 奈穂美

助教 看護学部（看護管理学領域）

Naomi BANDO

キーワード：コミュニケーションスキル、面接、看護学生、客観的臨床能力試験

看護学生の経年的コミュニケーションスキルの構造化

【研究の概要】

医療コミュニケーションに関する文献を検索した。複数の文献の中から、医療面接のプロセスごとに、医療面接時に必要なコミュニケーションスキルについて集約し、医療面接場面の評価指標の根拠とした。

OSCE（客観的臨床能力試験）実践場面の動画データの中から、技術を提供する課題（1年次生と3年次生）と、問診・指導に関する課題（2年次生と4年次生）を選び、作成した評価指標を用いて看護実践場面の看護学生のコミュニケーションスキルを評価した。その結果、2つのことが明らかになった。

1つは、技術を提供する課題では、言語にとどまらず、行為を含めて患者とのコミュニケーションを図り、信頼関係を構築していることがわかった。加えて、非言語的なコミュニケーションが半分以上を占め、その行為も状況や患者個人に応じて異なっていた。

2つめに問診・指導に関する課題では、2年次生と4年次生ではコミュニケーションスキルの使い方が異なっていた。2年次生は模擬患者が発信する情報を傾聴することが多く、4年次生は短時間で模擬患者との信頼関係を構築し、模擬患者から情報を引き出すように関わっていた。

研究期間を通して、研究者間で評価指標の作成、データの分析と解釈において、コミュニケーション研究の視点から検討を重ね、課題を見出した。

松浦 和代

教授 看護学部（小児看護学領域）

Kazuyo ATSUURA

キーワード：安全教育、小学校、低学年、基礎活動力

低学年児童の基礎活動力を高める転倒予防マットレスの開発と運動プログラムへの適用

【研究の概要】

1) 転倒予防マットレスの開発とデザイン

転倒予防マットレスは、低学年児童の身長、脚力や歩幅等の身体的特徴を考慮し、1辺が43cmの正方形で、厚さ5cmのウレタンフォームをターボリンで縫製し、平面型・低反発型・傾斜型・ピラミッド型・ビーズ型の5種類を作成した。

2) 方法

札幌市内A小学校において、2011年4月から2014年3月、低学年児童を対象に転倒予防マットレスによる運動プログラムを実施した。最初の6か月間は体育館や玄関ホールに設置し、児童の自由使用とした。その後7～16か月の間は、自由使用に加えて、体育の準備体操として約10分間/回使用した。5種類1セットの転倒予防マットレスを体育館の4角に各2セット（計8セット）を配置し、学級担任の教示に従い、その上を歩く、軽く走る等の準備運動に使用した。

3) 転倒予防マットレス導入前後の基礎活動力の変化

転倒の予兆指標は、①左右の握力、②左右の片足立ち、③反応時間、④前方リーチの4項目とした。経時的変化（導入時、4か月目、12か月目、16か月目）を調査した。導入時に比較して16か月目では、①②④の測定値が有意に上昇し（各 $p<0.01$ ）、③は有意に短くなった（ $p<0.01$ ）。また、学校管理下の活動における受傷の月別発生件数をみると、7か月目以降は徐々に減少した。

現在、北海道内の児童・生徒の体力は全国最低水準にある。この問題は、文部科学省が行う全国体力テストにおいて、北海道が初めて参加した2008年度以降2014年度（最新値）まで一貫して指摘されている。転倒予防マットレスは体力向上においても有効な教具ではないかと考える。

上村 浩太	准教授 看護学部（小児看護学領域）
Kouta UEMURA	キーワード：小児看護、小児がん看護、看護師への継続学習支援、子どもと死、子どもと遊び
看護師への継続学習支援「リレー方式学習」の展開・評価	
【研究の概要】 日本の小児がん年間発症数は 2000～2500 人と少ないため、看護師は少ない経験の中で看護を提供している可能性がある。交代制勤務、配置転換のある小児がん医療に携わる看護師の継続学習支援として、学習者を教えられる側から教える側に立たせ、アクティブに動かすことで、deep learning（深い学習）につながり、かつタイムマネジメントされた仕組みとして「リレー方式学習」を考案・展開・評価してきた。平成 26 年度は学習コンテンツを追加し、リレー方式学習の再評価と具体的支援の方向を転換した。 学習コンテンツは、小児がん専門医から口腔内常在菌が敗血症の原因菌になっている現状の改善要請から、「感染予防的口腔ケア」をテーマに作成し、現場の小児看護専門看護師から意見を頂き、精錬させた。 リレー方式学習について小児専門看護師と再評価し、デメリット（教える側の負担、教える側と教えられる側を組み合わせる難しさなど）がメリットを上回っている現状などによる実施困難さ、交代制勤務における集合勉強会の困難さ、及び小児がん患者にケアを届ける看護師の主体的な継続学習の機会を保障する必要性を確認した。支援の持続可能性の観点から、いつでもどこからでもアクセスできる動画教材（10 分）を開発・展開・評価していくことへ方向性を転換することにした。今後は、学習コンテンツの動画を十数個開発し、看護師への展開・評価を行っていく。	

三上 智子	講師 看護学部（小児看護学領域）
Tomoko MIKAMI	キーワード：保健の授業、小学校、実態調査、健康課題
A 県内の保健の授業に関する実態調査の報告 — 第 1 報 小学校の調査 —	
【研究の概要】 【目的】本研究の目的は、A 県内全域の小学校で実施された保健の授業の実態把握を行い、健康課題への新たな対策を明らかにすることである。 【方法】1) 対象者：A 県内全域の小学校 1145 校の教諭。2) 調査時期：平成 25 年 8～9 月。3) 倫理的配慮：A 大学の倫理審査を受けた。調査用紙の返送をもって同意とした。4) 調査方法：独自に作成した選択式無記名自記入式調査を行った。質問項目は、どのような健康課題が保健の授業で取り上げられたのか、健康教育充実のための課題は何か等とした。5) 分析方法：SPSS 統計処理ソフトを使用し、単純集計を行った。 【結果】回答数は 392 校(回収率 34.2%)であった。保健の授業で取り上げた単元は、「生活のしかたと病気」(82.4%)、「病気の起り方」(81.6%)、「病原体と病気」(79.1%)であった。保健の授業以外に実施した健康教育では、学級活動、あるいは総合的な学習として、「生命・性に関するもの」、「食に関するもの」「口腔保健に関するもの」が上位を占めており、多くの小学校でそのテーマは共通していた。授業で難しい取り組みとして「自らの健康問題を主体的に解決していく力を育てる工夫」(58.4%)や「身近な問題や自分の問題として生徒に意識づけること」(54.6%)があげられた。 【考察】小学校の保健の授業では、主に、児童の生活、病気、生命に関する内容を実施していることがわかった。また、児童が、自らの健康や身近な健康問題を、主体的に考えられる内容の健康教育が望まれていた。	

宮崎 みち子

教授 看護学部（母性看護学領域・助産学専攻科）

Michiko MIYAZAKI

キーワード：性暴力被害者、女性、健康保護
ワンストップ支援センター

性暴力被害者支援に関する研究

【研究の概要】

本研究の目的は「性暴力被害者支援センター北海道 SACRACH（以下、SACRACH）」の相談活動の実態を明らかにすることである。SACRACH(平成 24 年 10 月開設、所在地 A 市)の相談活動は電話・面接相談、付添い支援であり、相談時に使用する「相談ケースシート」内容をデータとして分析した。なお、本研究は研究代表者所属の B 大学倫理委員会の承認を得た。

その結果、相談開設日数 364 日で 306 件の相談を受けた。その内訳の 9 割は電話相談で、相談内容は強姦・強制わいせつ・性虐待等である。相談者の居住地は市内 58%、道内 32%、道外 2%、不明 8%である。被害者の年代は 10 代 23%、20 代 16%、30 代 15%、10 代未満 11%、40 代 9%、50 代 6%、60 代以上 3%、不明 17%である。

平成 23 年 3 月、内閣府が性犯罪・性暴力被害者の総合的な支援による被害者の心身の負担軽減・健康の回復と共に、警察への届出促進・被害の潜在化防止を目的にワンストップ支援センター設置促進を打ち出した。これを受けた SACRACH の活動実態から相談率の高さ、相談内容の多様性、居住地外からの相談 4 割であることが明白である。これは本活動の継続と支援センターの拡充を代弁するものと考ええる。また、被害者の 3 割以上が 10 代・10 代未満から、保護者、保育園・幼稚園・小中高の教育機関、医療・行政機関との協働・連携の更なる緊密性を求められるものといえる。

渡邊 由加利

准教授 看護学部（母性看護学領域）

Yukari WATANABE

キーワード：妊娠期、夫婦、子育て支援、助産師

妊娠期・育児期にある家族の子育て支援プログラムの検討 ー「おしゃべりサロン」開催ー

【研究の概要】

少子化を背景として、孤立に伴う母親父親の「育児不安」「育てにくさ」「うつ病」「虐待」などの問題、それらが子どもの発育・発達にも影響することが明らかになり、地域において子育て支援が行われてきましたが、現段階では大きな変化はなく、父親のうつ病など更なる課題も浮上している。

これらの課題の解決に向けて、国の施策においては、平成 27 年 4 月から「健やか親子 21」（第 2 次）、「子ども・子育て支援新制度」がスタートした。いずれの施策においても、妊娠期からの切れ目のない支援が課題として挙げられている。

研究テーマは、妊娠期、育児期にある家族が少しでも安心して妊娠、出産、育児期を過ごすことができるためにどのような支援ができるかを具体的に検討することである。

今年度は、妊娠期と育児期にある家族を対象とした「おしゃべりサロン」を開催した。プログラムの意図は、妊娠期と育児期の家族が場を共有することにより、育児のイメージ化、自分の育児を振り返り承認できる機会とすることである。参加者は妊娠期の女性 2 名、育児中の女性 11 名、乳幼児 13 名（3 か月～6 歳）であった。「妊婦が参加できるサロンがあまりない。育児中はバタバタするので、妊娠中から知っている人がいると産後も参加しやすいのでよい」、「暖かい雰囲気よかった」などの評価が得られた。今回は、女性のみでの参加であったが、今後は男性も参加しやすい場をつくり、親になっていくうえで必要となる妊娠期からの具体的なプログラムを更に検討していく。

山内 まゆみ

講師 看護学部（母性看護学領域）

Mayumi YAMAUCHI

キーワード：助産師基礎教育、成人学習、ポートフォリオ、
キャリア支援、プロジェクト学習

「私はこんな助産師になるぞ！」プロジェクト 2014 の運営と評価

【研究の概要】

助産学専攻科生への本プロジェクトは、教育課程の中で特に助産学実習と並行する形で、なりたい助産師像を基に教育課程修了時に目指す「マイゴール」を設定する。その到達度は、年間を通じて高めるための具体的行動目標を、経過発表会、成果報告会、或は教員との面談を通じて明らかにする。そうしてマイゴールに近づいていくというプロジェクトである。プロジェクト終了時にアンケート調査をした結果、本プロジェクトは、教育過程を進める上で有効と評価した学生は 9 割弱おり、ほぼ有効だったと評価する。また有効とした学生は、自己の到達度を他者と共有する経過発表会、成長報告会を通じて、他者の抱える課題等を共有できることや、その機会を通じて他者から励ましのメッセージを受け取ることが、1 年間の教育課程を乗り越える糧の一つとなっていることが明らかとなった。一方、自由記述欄より、過密カリキュラムの中で記録用紙に十分な時間をさけなかったという感想や、「有効ではなかった」とした学生は「時間がない」と記述しており、過密な教育課程で本プロジェクトを進める、学生への精神的負担感も確認できた。平成 27 年度は、過密な教育課程の改善に向け、実習期間、授業進行の見直しを行う予定。したがって引き続き平成 27 年度の成果を評価する必要がある。

山本 真由美

講師 看護学部（母性看護学領域）

Mayumi YAMAMOTO キーワード：母性看護学、看護技術、教育

母性看護学における実践能力を強化するための教材の開発

【研究の概要】

産後の母親の身体的経過を判断するためには、子宮を正しく触診する看護技術の修得が不可欠である。平成 25 年度は「産褥子宮触診モデル」（高研：図 1）を使用し、演習を行った。このモデルではコミュニケーションを取り、母親の反応を見ながら技術を提供することができなかった。そこで平成 26 年度から手製の「装着型産褥子宮触診モデル」（図 2、図 3）を作成し、その改善に努めた。このモデルは布製で座布団状に作成した腹部の下に、腹巻で粘土の子宮を固定する形であった。演習で使用する中で、子宮が移動しやすく、繰り返し圧迫することで子宮が変形した。

そこで、問題点を改善し、母性看護技術の自己評価・向上を図ることができる「装着型産褥子宮モデル」の開発が必要となり、継続して研究を進めていく必要があることが明らかとなった。

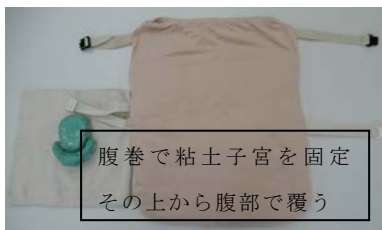


図 2：手製のモデル



図 1：高研モデル使用時



図 3：手製モデル使用時

助教 看護学部（母性看護学領域・助産学専攻科）

キーワード：助産師、産科医師、協働、専門職的自律性

助産師の専門職的自律性と産科医師との協働の関連

【研究の概要】

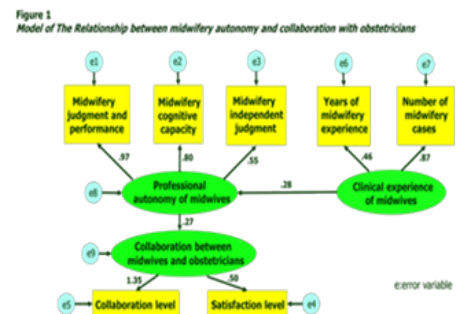
目的：助産師の専門職的自律性と助産師の産科医師との協働の関連性を分析する。そのことから、助産師の自律性は助産師と産科医師との協働関係を強化する要因であることを明らかにし、よりよいマタニティケアシステムの方向性を推進するための示唆を得る。

方法と対象：全国より無作為抽出された分娩取り扱い医療施設に勤務し、現在分娩を取り扱っている助産師経験年数 3 年目以上の常勤助産師を対象に、自己記入式質問紙を用いた横断的量的調査を実施した。

研究協力者は 578 名（有効回答率 59.5%）であった。本分析には属性の影響を制御した母集団として職位をもつ 129 名を分析対象とした。分析には Amos6.0 を使用し、共分散構造分析を試み、理論的に解釈可能で最も適合度の高いモデルの検討を行った。

結果（図 1 参照）：「助産師の専門職的自律性」に対して、「助産師としての臨床経験の蓄積」の直接効果が認められた。また、「助産師の産科医師との協働」に対して「助産師の専門職的自律性」の直接効果が認められた。「助産師の産科医師との協働」に対して「助産師としての臨床経験の蓄積」の間接効果は 0.08 であった。

結論：助産師と産科医師との協働関係を促進していくためには助産師としての臨床経験を積み重ねるとともに、助産師が専門職としてより自律性を強化する必要性が示唆された。



教授 看護学部（成人看護学領域）

キーワード：がん看護、認知症、疼痛アセスメント、QOL

認知症を伴う高齢がん患者の疼痛アセスメントのプロセス

【研究の概要】

本邦においては急速な高齢化により認知症を伴うがん患者が増えている。認知症を伴うがん患者は痛みを適切に表現できないため痛みの過小評価、過少治療が報告されており、認知症を伴うがん患者の疼痛アセスメント指標を作成することが喫緊の課題である。

本研究は、認知症を伴う高齢がん患者のがん疼痛のアセスメント指標を開発することを目指している。平成 26 年度は熟練看護師 18 名に対して参加観察と半構造化面接を行ない、がん疼痛を判断するまでのアセスメント内容とプロセスを分析中である。

貝谷 敏子

准教授 看護学部（成人看護学領域）

Toshiko KAITANI

キーワード：地域連携、在宅看護、緩和ケア、褥瘡

リソースナースの地域活用による シームレスな連携体制の構築と効果の検証

【研究の概要】

A市のB地区訪問看護ステーション（全21か所）で「連携に対するニーズ」に関する調査を実施し、6施設の看護師63名に配布し、21名から回答が得られ（回収率33.3%）、連携の現状とニーズの把握を行った。緩和ケアに対して何らかの困難を感じている訪問看護師は医療連携を積極的に行っており、専門家との連携を図ることへのニーズがあることが明らかになった。第一段階の実態調査の結果より、アセスメントの過程が可視化でき、在宅の看護師が相談基準の判断が容易となるようなツールの開発を目標に、クラウド型アプリケーションを使用した相談機能とタブレット端末を用いたシステムを構築した。その際の情報のデータベースは、緩和ケア専門看護師1名、在宅診療医師・緩和ケア医師4名へ「データベース構築に関するインタビュー調査」を実施し、必要な情報を抽出した。逐語録より連携のために必要な情報として4つのカテゴリと11のサブカテゴリを抽出した（表参照）。現在は引き続き考案した連携のシステムの試験運用を実施中である。

サブカテゴリ	カテゴリ
病院から在宅への移行のルートを活用	連携開始の窓口
通院時のコンファレンスで顔をつなぐ	
全容が見えず問題に気が付かない	相談の窓口をつくる
痛み止めの処方のある方をリストアップ	
これまでと違う症状変化をあげる	介入の余地を拓く情報
本人の期待度とそれに対する医療者評価との一致度	
本人の満足度	専門家の介入が必要
死期を見極めタイミングを計る	
スピリチュアルな苦痛への介入	
複数家族との意思決定の調整	
小児がん等経験のない症例	

菅原 美樹

准教授 看護学部（成人看護学領域）

Miki SUGAWARA

キーワード：高度実践看護師、臨床実践能力、OSCE

高度実践看護師の教育と評価に関する研究

【研究の概要】

イギリスにおける高度実践看護師（ナースプラクティショナー）の教育とその評価に関する情報収集を主な目的とし、平成27年3月23日と24日の2日間、ロンドン・サウスバンク大学のHelen Ward（senior lecturer）と面談し、サウスバンク大学における卒後教育プログラムについて説明を受け、日本の現状と比較しながらディスカッションを行った。高度実践看護師であるナースプラクティショナーの資格を取得するには、学生は仕事を継続しながら大学で学び、各職場でメンターとなる医師や経験のあるクリニカル・ナース・スペシャリスト、ナースプラクティショナーを自分で探して依頼し、自身の実践能力の向上を図っている現状を知ることができた。このような仕組みは日本にはなく、非常に興味深いものであった。また、「Advanced Assessment Skills for Clinical Practice」の講義・演習を見学する機会を得た。身体診察のスキルについては、イギリスでは基礎教育ではあまり行っておらず、ナースプラクティショナーやクリニカル・ナース・スペシャリストなどの高度実践看護師を目指す学生のプログラムのひとつとして提供されていることが分かった。学生は大学の講義・演習で学んだスキルを各職場でメンターとともに実践しながらスキルを向上させ、OSCEによってその到達度評価を受けていることが確認できた。



写真1 授業風景

神島 滋子 講師 看護学部（成人看護学領域） Shigeko KAMISHIMA キーワード：高次脳機能障害、脳損傷、家族
高次脳機能障害患者・家族の生活の実態と 生活上の工夫について
【研究の概要】 交通事故や脳卒中などによって高次脳機能障害という病態に陥ると、見かけ上は後遺症がないのに社会的な参加が困難になる。このような症状のある人の家族の生活の実態を明らかにするとともに、家族がその人と関わる上でどのような生活上の工夫をしているかを明らかにすることは、医療や福祉で看護職がこのような人と関わる上での重要な資料となる。そこで患者会に依頼し、おもに高次脳機能障害をもつ人の妻の集まる会に参加し、そこで語られる内容について同意を得て録音した。その内容を逐語録（文字データ）に変換し、逐語録からテキストマイニングを用いて分析し、生活の実態と工夫を中心に分析を試みている。現在分析中である。

工藤 京子 講師 看護学部（成人看護学領域） Kyouko KUDOH キーワード：災害、避難行動、在宅酸素療法患者
在宅酸素療法患者の災害に対する認識
【研究の概要】 呼吸器疾患のために在宅で酸素濃縮機を使って酸素療法を行っている人は災害時など停電になると機械が停止することから対処行動が必要となる。そのため、災害に対する認識の現状を明らかにすることを目的に質問紙調査を実施した。調査項目は、災害時の対処行動の説明をされているか、災害への意識や知識と備え、家族や医療者との相談の有無などである。 結果：26名（男性15名、女性11名）から回答があり、平均年齢 76±10.5歳で、9割が独居又は夫婦2人暮らしであった。酸素を使用しながらでも9割以上が室内での行動は自立していると答えていたが、外出となると4割弱に低下していたことから、避難行動には介助が必要であると考えられた。また、半数以上が災害時の説明を聞いたと回答し、8割が災害を意識していたが、家族と話し合っている人は4割弱、医療者と話し合っている人は1割弱で、災害を想定した話し合いが行なわれていないことが明らかとなった。 自由記載には、停電時の酸素の確保を心配し、体力的に避難所や病院には自力では行けない、人混みでの呼吸状態悪化も心配であると書かれていた。中には「覚悟はできている」「自分は終わるだろうと思っている」「仕方ない」「ダメになるのではないかなと思う」といった諦めや覚悟をしている傾向もうかがわれた。今後、このような災害弱者に対して、地域を含めた取り組みの必要性がある事が示唆された。

藤井 瑞恵 Mizue FUJII	講師 看護学部（成人看護学領域） キーワード：血液透析、糖尿病、日常生活動作（ADL）、生活習慣病
北海道の壮年期の維持透析患者における生活上の課題	
【研究の概要】 北海道に在住する壮年期透析患者の身体的状況と、日常生活や就労などの心理社会的側面、冬期の通院や自己管理などの関係について検討している。 2014 年は冬から春にかけて質問紙調査を実施した。対象は北海道の 4 支庁 11 に住み、病院で維持透析を受けている壮年期の男女であった。調査内容は年齢、性別、透析歴、透析導入の原因疾患、合併症、自覚症状、日常生活動作、就職の有無と内容、通院手段、居住地区、冬期通院の経済的負担感の有無等であった。 結果、分析対象者は約 200 名であった。これまでの分析から、①食事や睡眠などの生活習慣がよいとメンタルヘルスがよい、また掻痒感や倦怠感など自覚症状のコントロールをすることで睡眠の質が上がる可能性があること。②冬期の通院負担は、経済的要因および ADL の低下している患者・自覚症状数の多い患者により強く影響し、冬期間に対応した支援が必要であること。③北海道の壮年期維持透析患者では ADL が、自覚症状・合併症・就労状況を反映する重要な指標であること。④糖尿病性腎症由来の維持透析患者は、ADL と就労率も低く、長期透析になるとソーシャルサポートも悪くなることなどの結果が得られている。	

柏倉 大作 Daisuke KASHIWAKURA	助教 看護学部（成人看護学領域） キーワード：注射の技術、動画、シミュレーション、教育
動画を活用した自己学習支援型の注射のシミュレーション教育に関する研究	
【研究の概要】 本研究では、注射の技術トレーニングを実施する看護学生が日常的に使用しているスマートフォンやタブレット端末を活用して、手技の振り返りをするための動画を撮影・管理でき、教員とも共有できるシステムの開発に取り組んだ。注射の技術トレーニングにおける動画での振り返りの効果や、動画を自己学習に取り入れる方法論に関する研究を既に 2 年間継続し、「可視化機能を導入した注射シミュレーション改良モデルの使用感に関する研究」の発表においても、注射の技術トレーニングにおける動画での振り返りに実証済みであったが、撮影に必要なビデオカメラ・三脚の設置や、学生との閲覧・共有にも手間と時間を要するため、あまり取り入れられていないのが現状である。本研究ではそれらの知見をもとに、より日常的に動画による学習が可能となるようなシステムの開発を目指した。 ベースとなるシステムは Apple 社製の OS X Server を用いて、ワークグループマネージャによるネットワークユーザアカウントの作成で Mac、iPhone、iPad でのファイルの共有を検討した。システムの一部は動作しているが、学生が撮影・保存した動画を教員と共有する場合、Mac でないと学生が撮影した動画へのコメントを追記するのが難しく、どの動画に対するコメントなのかわかりにくい状況であるため、運用の段階には至っていない状況である。また、Mac OS のみの動作環境となっているため、Mac に習熟した教員でないと動画の共有・指導が難しいのが現状である。 今後は Windows からのアクセスが可能となるようなシステムの構築と、動画を介したテキストデータの共有システムを検討する必要がある。本研究遂行の過程で、システム構築を専門とする、株式会社 VERSION2（札幌市内）の代表取締役である大西昭夫氏の協力を得られることとなり、より高度なシステムの構築を望むことができる。システムは今年中の完成を目指し、その後学生を対象とした運用を試みる予定である。	



村松 真澄

准教授 看護学部（老年看護学領域）

Masumi MURAMATSU キーワード：北海道、周術期口腔機能管理、看護管理者

北海道の病院の周術期口腔機能管理に関する 看護管理者の取り組みの実態調査

【研究の概要】

北海道の病院の周術期口腔機能管理に関する看護管理的な取り組みの実態を明らかにするために、看護管理者を対象に無記名自記式質問紙調査を郵送法で実施した。質問紙は 88 施設に郵送し、質問紙の回収施設は 49 施設、回収率 54.5%であった。すべて有効回答として分析対象とした。調査の結果、周術期口腔機能管理加算が算定できている施設は、24.5%であった。病院歯科が担当者である施設が 75.0%であった。周術期口腔機能管理加算の依頼時期は外来受診中が 66.7%，であった。口腔ケアの担い手については、加算の算定がされている施設は、他職種であった。今後は、周術期口腔機能管理加算が算定されている施設としない施設で肺炎や術後合併症の発生率などの比較検討が必要であると考えられた。

周術期口腔機能管理加算を算定の有無	施設数	%
算定している（全例でなくとも部分的も含む）	12	24.5
算定していない	36	73.5
無回答	1	2.0
合計	49	100.0
周術期口腔機能管理の担当する歯科医師		
院内の歯科医師	9	75.0
院外の歯科医師との連携	3	25.0
合計	12	100.0

周術期口腔機能管理の依頼時期	n
外来受診中	7
入院してから	5
手術や治療の直前	1

原井 美佳

講師 看護学部（老年看護学領域）

Mika HARAI

キーワード：中年期女性、尿失禁、対処行動

中年期女性の尿失禁リスク要因解明と 尿失禁への対処行動促進に関する研究

【研究の概要】

尿失禁は QOL (Quality of life) に大きくかわる症候であるが、治療、健康支援に繋がっていない潜在的有訴者も多い。女性においては、肥満、加齢、出産などのリスク要因が報告されているが、研究対象は周産期・育児期、あるいは老年期であることが多く、50 歳以上 65 歳未満の年代に限った研究は見出せない。この年代は次なる老年期に繋がる年代であることから、その尿失禁の有訴率と経年変化、およびリスク要因を明らかにすることは、老年期の QOL を検討するうえで不可欠である。

これらをふまえ今年度は、中年期女性の尿失禁のリスク要因と、平成 22 年度から平成 24 年度に実施した調査における前期高齢者の女性の尿失禁リスク要因を比較検討した。その結果、65 歳以上 75 歳未満の女性の尿失禁のリスク要因は、過去の最大体重、喫煙指数、健康状態、膀胱疾患の既往、痔疾患の既往、母の尿失禁の既往であったが、本研究における 50 歳以上 65 歳未満の女性においては、これらのリスク要因に有意差はみられなかった。

前期高齢者である女性の尿失禁有病率は 29.5%、中年期女性の尿失禁有病率は 34.1%であり、中年期女性の方が高い割合を示した。前期高齢者の女性にとっての尿失禁のリスク要因は中年期女性においてはリスク要因ではなかったことから、尿失禁のリスク要因は年齢によって変化する可能性が示唆された。

山本 勝則

教授 看護学部（精神看護学領域）

Katsunori YAMAMOTO

キーワード：シミュレーション教育、リアリティ、自信、
精神看護学、模擬患者

精神障害者への関わりについての看護学生の自信の変化 —精神症状を演じる模擬患者との演習の前後比較—

【研究の概要】

精神症状を演じる模擬患者との演習が、患者に対する関わりについての看護学生の自信に、どのように影響するかを調べた。

1. 自信の程度に関する Visual Analogue Scale

まったく自信がない 0 ————— 100 完全に自信がある

演習の前後で「精神障害のある患者さんとの関わり方について、どの程度上手にできそうだと思いますか」と問い、両端を「まったく自信がない」0mm、「完全に自信がある」100mmとして、印をつけさせた。

演習前後で自信が増加した者は 53 名、減少した者は 12 名、不変 2 名であった。増加の範囲は 1mm から 60mm であり、減少の範囲は -1mm から -13mm であった。平均値の差は 18.55mm であり、自信の程度は 0.1%水準 ($p < 0.001$) で有意に増加していた。

2. 自信の増減およびその理由に関する質問

増加した 減少した 理由（ ）

演習後に、今日の授業で精神障害のある患者さんとの関わり方について「自信が増加しましたかそれとも減少しましたか」と問い、「増加した」あるいは「減少した」の一方に○をす

るように求め、理由の記載も求めた。

演習後に自信が増加した者は 41 名 (64.1%) であり、減少した者は 23 名 (35.9%) であった。

自信が「増加した」主な理由は「体験できた・慣れた」「接し方・対応の仕方が、分かった・イメージできた」「うまくできた・ほめてもらった」「実践的・リアリティのある体験ができた」などであった。

「減少した」した主な理由は「難しかった・うまくできなかった・どうしたらよいかわからなかった」「怖い・怖かった」であった。

守村 洋

准教授 看護学部（精神看護学領域）

Hiroshi MORIMURA

キーワード：メンタルヘルス、うつ病、自殺予防

メンタルヘルスおよび自殺予防に関する研究

【研究の概要】

平成 26 年度の研究概要を、アメリカの医師であるカプランが提唱した予防の概念に基づく以下の 3 つのステージを用いて説明する。

第一次予防；精神疾患の発生原因の防止、つまり、周りの人が気づき・つながり・見守ることである。平成 26 年度も悩んでいる人に気づき、話しをきき、必要な支援につなげ、見守る役割となるゲートキーパー講習の講師を務めた。前年度に引き続き千歳保健所で「こころの受け止め方」を講義し、その後に参加者とロールプレイをしてゲートキーパー養成に貢献した。また、札幌市のゲートキーパー研修でもロールプレイを演じた。

第二次予防；精神障がい者の早期発見と早期治療、つまり、なるべく早い時期における発見と治療開始に強調がおかれる。自殺未遂者が最初に介入するのは救急医療機関であることから、平成 26 年度札幌市自殺未遂者実態調査を行った。

第三次予防；精神障がい者に対する社会復帰の援助と再発防止、つまり、リハビリテーションへの援助とともに、再発予防が特に注目される。精神障がい者セルフヘルプ・グループへのフィールドワークを継続しながら、北海道精神医療審査会委員および札幌市地域福祉生活支援センター権利擁護委員会などを兼任し、精神障がい者への地域生活支援について保健・医療・福祉の視点で研究を行った。特に権利擁護の観点では、非自発的な精神科病院への入院に伴う患者の処遇改善や退院請求、地域生活を営む際に判断能力を問われる際の支援等である。

星 幸江	助手 看護学部（精神看護領域）
Yukie HOSHI	キーワード：長期入院統合失調症患者、熟練看護師、臨床判断、退院支援、退院時期
長期入院統合失調症患者の退院好機を見定める臨床判断要素 ～熟練看護師の関わりに焦点を当てて～	
【研究の概要】 退院支援の困難要因や成功要因、精神看護における臨床判断についての文献は散見されるが、「長期入院統合失調症患者の支援のどの時期が退院時期と見定めているかという熟練看護師の臨床判断の内容と文脈」についてはほとんど明らかになっていない。 そこで今回、精神科病棟に勤務する看護師が長期入院統合失調症患者の退院時期を見定める際の看護師の臨床判断の内容と文脈を明らかにし、退院支援に向けた効果的なケアのありかたへの示唆を得るため研究を行った。 調査は、10年以上の長期入院統合失調症の退院支援の経験がある5年以上の正看護師11名を対象とした。これらの対象者にインタビューし、逐語録を作成した。その逐語録から、生データの意味の観点から質的にコード化した。 現在、得られたコードを、臨床判断の文脈（どんな状況が存在していたのか）と要素（コードが家族の考えなのか、本人の考えなのか等）の観点からカテゴリー化し、カテゴリー間の関係性をみて、看護師の臨床判断の道筋を説明する段階である。 引き続き、平成27年度には、カテゴリー間の関係を分析し、まとめていく予定である。	

スーディ神崎 和代	教授 看護学部（在宅看護学領域）
KANZAKI-SOOU DI Kazuyo	キーワード：認知症、遅延促進環境、回想
認知症状遅延を意図した環境整備	
【研究の概要】 Although there is no cure for Alzheimer's disease, there are several therapy options. One of the keys to delaying dementia among older adults is the physical environment. However, urban facilities, surrounded by high-rise buildings, can limit access to the outdoors. At a two-story LTCF (50 residents/unit, av. age 88±4.1, FAST level: 5-7) in central Japan, a garden for dementia afflicted residents was created on the rooftop. Upon consultation with an area botanical expert, the researcher chose flora specific to the area which residents would be familiar with. Within the same LTCF, landscapes familiar to the residents were painted on murals, bringing nostalgic outdoor views within reach of residents unable to go outside. To create this painting, local historical data (photos and news), was used so that the wall painting was not only a substitute for a real outside view but also represented residents' memories of their youth. This is an example of bringing the outside world indoors for residents unable to go outside or for whom the view is obstructed by large buildings. All residents unless bed-ridden otherwise visit the mural at least once a day. Analyzed conversation and words of five residents during their visits, and the following three key words were extracted most: "remember" "dear" "beautiful."	

菊地 ひろみ

准教授 看護学部（在宅看護学領域）

Hiromi KIKUCHI

キーワード：訪問看護ステーション、新卒看護師、教育プログラム

訪問看護ステーションの看護師教育プログラム開発に係る基礎研究

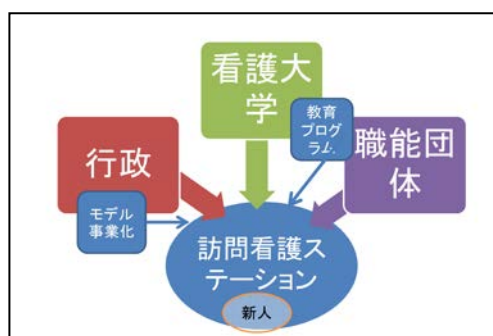
【研究の概要】

訪問看護ステーションの新人教育プログラムの先行事例として、東京都、千葉県、山梨県等で、大学・自治体・看護協会が協力してモデルづくりが行われている。

そのうち、東京都で実施している「東京都訪問看護教育ステーション事業」は東京都の助成を受けて都内5事業所で実施しているもので、新人教育のモデル事業の他に、ブランクのある看護師を対象に研修を行っている。訪問したMステーションでは、教育実績として3年目となる訪問看護師を新卒から教育し、現在では家族からも信頼される訪問看護師に育っているとのことであった。訪問看護ステーションで新人を育てるメリットとして、療養者の体調の変化がゆっくりなので、フィジカルアセスメントや技術トレーニングがゆっくりとできる点である。また、自然に家庭環境や家族を見る視点が養われるのもメリット、とのことであった。Mステーションでは毎年新卒者の就職希望があるが、欠員が生じないので断っている状況であるとのことであった。

一方、北海道の訪問看護ステーション管理者に対するヒヤリング果では、「一定期間新人を雇用する余力がない」、「教育体制が整わない」などの課題が出され、小規模経営の課題が出された。「若い人には在宅看護は難しい」といった意見もあり、受け入れ側の考え方が影響していた。

在宅医療の受け手である訪問看護師の確保は喫緊の課題である。しかし、訪問看護ステーション単体で新人教育を行うことは、経営的にもプログラムのにも困難である。自治体や職能団体、大学が協力して体制を構築する必要がある。



御厩 美登里

助手 看護学部（在宅看護学領域）

Midori MIMAYA

キーワード：訪問看護師、職務継続

訪問看護師の職務継続意向に関連する要因

【研究の概要】

訪問看護師の職務継続意向に関連する要因を明らかにすることを目的に、北海道の訪問看護ステーションで訪問看護に従事する、管理者を除いた常勤・非常勤看護職を対象に自記式質問紙調査を行った。対象者437名のうち252名から回答が得られ、回収率は57.6%であった。訪問看護師の職務継続意向に関連する要因として、【個人属性】では「訪問看護師としての勤務年数」、【職場環境】では「休憩スペースの有無」、【同僚間コミュニケーション】では「同僚と、看護の提供に関する相談をする」「仕事のことで困った時それを得意とする同僚看護師に相談している」などが明らかになった。訪問看護師の事業所での過ごし方や同僚間のコミュニケーションが、職務継続意向を高めるために重要であることが示唆された。

河原田 まり子 教授 看護学部（地域看護学領域）

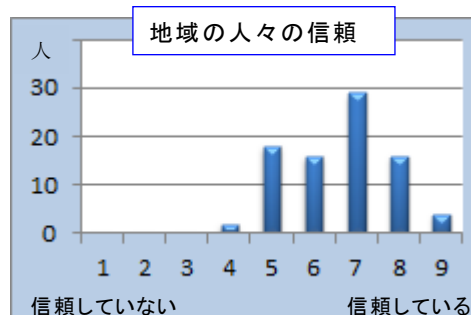
Mariko KAWAHARADA キーワード：ソーシャル・キャピタル、健康、地域住民、地域保健活動、保健師

ソーシャル・キャピタルを活用した地域保健活動の推進

【研究の概要】

地域の人々の繋がりや助け合いというソーシャルキャピタル（社会関係資本：SC）の醸成支援が保健師に期待されています。SC は人々のつながりから生じる力で健康との関連が近年多数報告されています。研究目的は SC を醸成する保健師活動と保健師が所属する市町村の SC の実態を明らかにし、地域保健活動推進のための示唆を得ることです。

北海道内の全市町村（179 ヶ所）の保健師係長を対象に郵送法による質問紙調査を実施し、85 名の有効回答を得ました。保健師の所属する市町村の SC の実態について 9 点法で尋ねました。点数が高いほど地域の SC が高いことを意味します。「地域の人々は信頼し合っている」6.6、「地域の人々は困った時に助け合っている」6.8、「地域の人々は地域活動に積極的に参加している」5.9 で、道内の市町村の SC 得点は中央得点 5 点よりやや高い状況にありました。また、全国 4 市町の保健師 11 名へのインタビュー調査の結果、SC を醸成するために保健師は「地域の住民同士がつながるための関わり」「地域にあるネットワークを生かした保健活動の展開」など地域の住民や関係機関とのネットワークを構築する活動を行っていました。本結果を生かし SC を醸成する地域保健活動の推進が必要です。



清水 光子 准教授 看護学部（地域看護学領域）

Mitsuko SHIMIZU キーワード：都市部、高齢者、ソーシャル・キャピタル

都市部の高齢者の暮らしをサポートする地域の人々の活動

【研究の概要】

都市部に居住する高齢者の生活に関して、同じ地域に住む人々のサポートの実際とその課題をソーシャル・キャピタル（以下 S・C）の視点から明らかにすることを目的に、A 市の高齢化率が高い 3 地区でグループインタビューを実施した。

高齢者のサポートは、公的機関、見守りや相談の役割を担っている地域の人々、各種ボランティアの人々によって行われていた。サポートの実際は、相談や見守りなど 6 カテゴリー（表 1）を抽出した。また、サポートの課題は「閉じこもりがちな住民」「医療福祉サービスに繋がらない」「近隣の人々との関係性」など 7 カテゴリーを抽出した。高齢者が生きがいを持ち地域で生活していくには、家族や地域の人々、行政機関などからの継続したサポートと、本人の地域社会活動が重要である。そのため、地域住民同士の信頼、絆、互換性の規範（S・C）を高め合うコミュニティづくりの検討が必要であり、今後の課題とする。

高齢者のサポートの実際(表 1)	
1	関係機関と一緒に高齢者の相談体制を整える地域住民
2	公的なサービス
3	高齢者の見守り
4	地域住民や関係機関で行う認知症の人への支援
5	地域活動から生まれる高齢者支援
6	閉じこもり予防としての場の設定

櫻井 繭子

講師 看護学部（地域看護学領域）

Mayuko SAKURAI

キーワード：産業看護、連携、事業場外資源、勤労者

産業保健に関わるシステムに関する研究

【研究の概要】

労働者への健康支援には、労働者のワーク・ライフ・バランスの考え方、生活上の問題や、ライフサイクル、ライフイベントにおける課題を含めた包括的な支援が必要となる。しかしながら、労働者が所属する企業規模や雇用形態、専門の保健スタッフの有無、企業の健康支援の実績の有無や担当者が制度をどの程度認知しているかなどの背景から、全ての労働者が健康に関する支援を受けられていない現状である。企業の規模やスタッフの有無などの条件に関わらず、企業が労働者の健康や生活の問題の必要に応じて、産業保健サービスを提供する複数ある事業場外組織から適したサービスメニューを選択し、活用すること、そして労働者が自らの健康を広い視野でとらえて利用できる産業保健システムの構築に向けた検討が必要である。

田仲 里江

助教 看護学部（地域看護学領域）

Rie TANAKA

キーワード：ソーシャル・キャピタル、都市、高齢者、住民のサポート、グループインタビュー

地域保健分野におけるソーシャル・キャピタルに関する研究

【研究の概要】

序論：日本は高齢社会を迎え、地域で暮らす高齢者に孤独死、孤立感などの問題が発生している。高齢者が安心・安全に地域で生活するには、ソーシャルサポートの授受が重要であると言われている。本研究は、地域の人々が、同じ地域に居住する高齢者の生活に関するサポートの実態とその課題を知ることが目的とした。

方法：日本の北方地域の A 市の高齢化率が高い 3 地域を研究の対象とした。地域の高齢者をサポートしている人々を対象に、グループインタビューを各地域 1 回、計 3 回実施した。インタビュー時間は約 120 分間であった。インタビューの協力者は、B 地域 7 人、C 地域 8 人、D 地域 9 人であった。インタビュー内容は、地域での高齢者のサポートの実態と課題とした。録音したインタビュー内容は、逐語録を作成し、質的記述的研究方法により分析した。本研究は、S 大学の倫理審査を受け実施した。

結果：協力者は、介護関係者、町内会のリーダー、相談や見守りの役割を持つ方、ボランティアなどの人々であった。協力者の年齢は 27 歳から 81 歳であった。地域で実施していたサポートは、①相談②安否確認③話し相手④日常生活の見守り⑤閉じこもり予防の事業⑥認知症の方への生活支援などであった。課題は、①閉じこもりがちな方や見守りを拒否する方への対応②認知症の方のサポートの難しさ③サポートが必要な人の把握の方法④近隣の人々の関係性⑤交流の機会の運営⑥少子高齢社会のまちづくりなどであった。

結論：高齢者の生活は、その地域に暮らす人々によってサポートされていたが、種々の課題も見つかった。人々が支えあうまちづくりの検討は、高齢社会に急務である。

札幌市立大学 教員研究紹介 2014

編 集 札幌市立大学地域連携研究センター

発行日 2015（平成 27）年 7 月 23 日

発 行 札幌市立大学地域連携研究センター

〒005-0864 札幌市南区芸術の森 1 丁目

TEL. 011-592-2346 FAX. 011-592-2369

<http://www.scu.ac.jp>

E-mail: crc@jimui.scu.ac.jp



www.scu.ac.jp

札幌市立大学

SAPPORO CITY UNIVERSITY

大学本部・デザイン学部・デザイン研究科

芸術の森キャンパス:005-0864 札幌市南区芸術の森1丁目

TEL. 011-592-2300

看護学部・看護学研究科・助産学専攻科

桑園キャンパス:060-0011 札幌市中央区北11条西13丁目

TEL. 011-726-2500